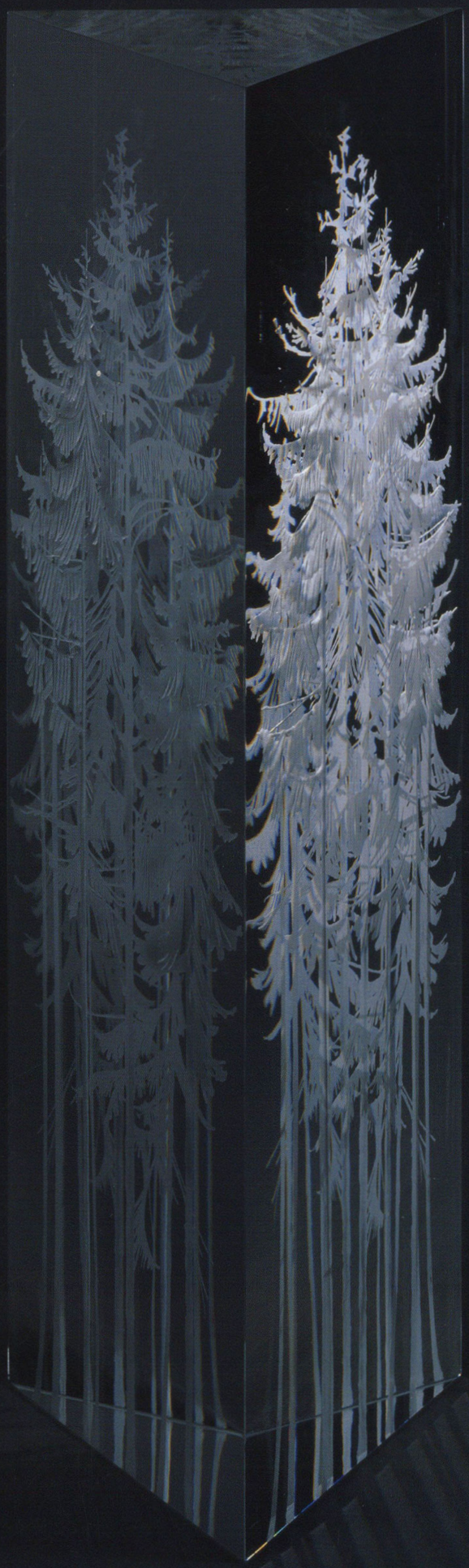


Greetings from Foreign Countries

— Beauty of Gifts from the Overseas

外国（とつくに）からの

——贈られた異国の美

ごあいさつ

Greetings from Foreign Countries

— Beauty of Gifts from the Overseas

外国（とつくに）からの

——贈られた異国の美

ごあいさつ

平成23年1月22日（土）～3月13日（日）

January 22 (Sat.) – March 13 (Sun.), 2011

宮内庁三の丸尚蔵館

The Museum of the Imperial Collections,
Sannomaru Shōzōkan

目 次

3　ごあいさつ

4　Foreword

5　外国賓客のご接遇 ── 昭和天皇が心を込めて務められた戦後35年の歩み

10　図版・解説

44　参考資料 ── 国賓・公賓一覧（昭和28年から63年まで）

47　出品目録

凡 例

・本図録は、平成23年1月22日（土）から3月13日（日）までを会期とする展覧会「外国からのごあいさつ―贈られた異国の美」の解説図録である。

・図録掲載の作品番号は、展示の出品番号と一致する。

・本展覧会で展示する作品は、すべて当館の所蔵品である。

・各作品のデータは、作者、作品名、員数、制作年、材質・技法、サイズ、伝来の順で記載している。
作品データの伝来および44～46頁の「国賓・公賓一覧」に記した国名は、原則として贈進を受けた当時の正式名称で表記している。

・図録に掲載した作品のサイズの単位はcmである。D（縦、奥行き）×W（横、幅）×H（高さ）の順で表示した。

・本展覧会の企画は、三の丸尚蔵館学芸室研究員五味聖が行い、同研究員松谷芙美が補佐した。概説は五味が執筆し、作品解説は以下のように分担執筆とした。作品番号1～6、10、11、17、22（五味）／7～9、13～15、19、21、26（研究員岡本隆志）／12、24、25、27、29、30（松谷）／16、20、28（研究員斉藤全人）／18、23（主任研究官太田彩）

・図録文中の賓客名は、宮内庁ホームページ、『宮内庁要覧』（平成17年度版）等の表記に従った。

・図録掲載の図版のうち、6～9頁に掲載の賓客をご接遇される昭和天皇と香淳皇后のお写真は、当庁総務課より提供を受けた。また、作品の図版は、遠藤純、加藤由紀夫（以上、（株）セブンプランニング）他が撮影した当館所蔵のフィルムによる。

ごあいさつ

毎年、海外から各国の国王や大統領などの元首を始めとする、その国を代表する方々が数多く我が国を訪れています。天皇皇后両陛下がこうした方々とお会いになるのも、大切なご公務の一つとなっています。

そのお客様の中でも、国として儀礼を尽くして公式にお迎えする元首やこれに準ずる方は国賓と呼ばれています。戦後、初めての国賓をお迎えした昭和28年以降、昭和天皇は香淳皇后と共に心を込めて賓客の接遇をなされました。昭和31年にエチオピア帝国皇帝が来日された際には、初めて宮中晩餐が行われました。そして、昭和49年にはアメリカ合衆国大統領が来日され、その翌年に昭和天皇と香淳皇后は、同国を答訪されました。さらに同年には英国女王陛下が来日されましたが、これは、先立つ昭和46年、昭和天皇と香淳皇后お二人での初めての外国ご訪問における、訪英に対する答訪としての来日でした。こうした国賓のほかにも、それに準ずる公賓、何かの機会に際して来日された賓客など、昭和天皇と香淳皇后は数多くの方々とお会いになり、現在の皇室における外国交際の広がりの基礎を築かれました。

本展では、昭和天皇と香淳皇后が戦後に来日された外国（とつくに）からの賓客のご接遇を通じて、友好の形として受け取られた品々を紹介します。これらは、それぞれの国の文化を代表するものであり、伝統技術による工芸品や、著名な作家の作品などが含まれています。昭和天皇と香淳皇后が重ねられてきた外国交際の一端に触れていただくとともに、異国情緒豊かな品々に親しんでいただく機会となれば幸いです。

平成23年1月

宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵　出品作品一覧　（第53回　外国からのごあいさつ－贈られた異国の美）

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	銀製盆		一点	1954年	p. 10
2	銀製蝋燭立		一対	1954年	p. 10
3	金銀製果物盛鉢		一点	20世紀半ば頃	p. 11
4	象牙製チェスの駒		一式	20世紀半ば頃	p. 12
5	金装短刀		一振	20世紀前半	p. 13
6	孔雀置物		一対	19世紀後半	p. 14-15
7	色絵金彩東屋に人物置物	ニンフェンブルク窯	一点	1960年	p. 16-17
8	色絵花卉文食器セット	トゥルネー窯	二十八点のうち	1760年頃	p. 18-19
9	カット・ガラス食器セット		二十八点のうち	20世紀後半	p. 20
10	金装刀		一振	20世紀後半	p. 21
11	獅子置物		一点	20世紀後半	p. 22
12	真鍮製飾花瓶		一点	20世紀後半	p. 23
13	三角柱ガラス置物	スチューベン・グラス	一点	1974年	p. 24
14	天目釉抜絵巡礼者文皿	バーナード・リーチ	一点	1970年頃	p. 25
15	手賀沼　我孫子	バーナード・リーチ	一点	1918年	p. 26
16	白い道（La Route Blanche）	ルネ・ジェニ	一点	1970年代前半	p. 27
17	貝の灰皿		二点	20世紀後半	p. 28
18	百驢図	梁黄胄	二巻	1978年	p. 29
19	花卉文ガラス鉢	クースタ	一点	1979年	p. 30
20	流れ　16（EL RIO XVI）	フェルナンド・ソベル	一点	1978年	p. 31
21	三彩駱駝		一点	20世紀後半	p. 33
22	フラミンゴ置物		二点	20世紀後半	p. 32
23	十長生図刺繍屏風	崔維鉉	二曲一隻	20世紀後半	p. 34-35
24	ノクシ・カンタ壁掛		一対	20世紀後半	p. 36-37
25	騎馬戦士像		一点	20世紀後半	p. 38
26	縞文ガラス花瓶	ヌータヤルヴィ	一点	1980年代	p. 39
27	猿型容器		一点	1986年	p. 40
28	冬の風景	エンゲルベルト・ ビトムスキ	一点	1986年	p. 41
29	ディナボウル（Dina-Boule）	コルネリス・ ジットマン	一点	1975年	p. 42

30	シーヌの夜（Nuit du Sine）	バダラ・カマラ（原画）／セネガル装飾美術工房	一点	1988年	p. 43

Foreword

Every year, many foreign visitors representing their countries come to Japan, such as the sovereigns or Heads of States of various countries. Their Majesties the Emperor and Empress receive them as a part of their important official duties.

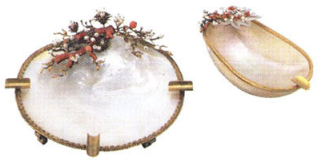
Among these visitors, foreign Heads of States or those equivalent, who are officially invited and received by the Japanese Government with the utmost courtesy, are referred to as State Guests. After the war, since the first State Guest was received in 1953, Emperor Showa and Empress Kojun wholeheartedly received these State Guests together. The first State Banquet was held when the Emperor of Ethiopia visited Japan in 1956. After the President of the United States of America visited Japan in 1974, Emperor Showa and Empress Kojun made a return visit to the U.S.A during the next year. In the same year, Her Majesty the Queen Elizabeth II of the United Kingdom visited Japan as a return visit towards Emperor Showa and Empress Kojun's visit to the United Kingdom in 1971, which was the first visit they made together to a foreign country. Along with these State Guests, Emperor Showa and Empress Kojun received many equivalent Guests on official visits, and other dignitaries visiting Japan, and established the foundations of the present wide ranged foreign relations of the Imperial Family.

In this exhibition, we will introduce various objects that Emperor Showa and Empress Kojun received as tokens of friendly relations, during receptions of distinguished guests from foreign countries after the war. They are pieces representing their countries' culture, including craft works created with traditional techniques, and works by famous artists. We hope that this exhibition will be a chance to become aware of the foreign relations that Emperor Showa and Empress Kojun fostered, and to enjoy these exotic works obtained through them.

January, 2011

The Museum of the Imperial Collections,
Sannomaru Shōzōkan

外国賓客のご接遇 ― 昭和天皇が心を込めて務められた戦後35年の歩み



はじめに

三の丸尚蔵館が収蔵する外国作品の多くは、明治期から昭和期にかけて、皇室が外国と交際される中で受けとられた品々である。来日された外国賓客からもたらされた品、皇室のご慶事の折りに贈られたお祝いの品、昭和天皇と香淳皇后が外国をご訪問された折りにご訪問先で友好のかたちとしてお受取りになった品などがある。これらの外国作品を紹介する展覧会を、当館ではそれぞれのテーマを設けた企画展としてこれまでに3回開催している。その4回目となる本展では、戦後の昭和期において国賓や公賓として来日された外国賓客から昭和天皇と香淳皇后が受けとられた品々に焦点を当てている。そこで、本文では本展の出品作品を通して、昭和天皇と香淳皇后が公務としてお務めになった国賓と公賓のご接遇の様子を紹介する。まずは、今日のご接遇の様子をおおまかに紹介しておきたい。

天皇皇后両陛下の外国賓客のご接遇

皇室による外国賓客のご接遇は、平成の今日では次のように行われている。まず、国賓は、外国から来日される賓客の中でも国として最高の儀礼を尽くしてお迎えする方のことで、国王や大統領などのその国の元首、またはこれに準じる方に限られている。国賓の招聘や接遇は、閣議を経て決定される。天皇皇后両陛下が行われるご接遇としては、まず、国賓が到着された当日もしくは翌日に歓迎行事が行われる。以前は迎賓館赤坂離宮の前庭で行われていたが、近年は宮殿東庭で行われている。両陛下が国賓のご夫妻をお迎えし、壇上に並ばれて、陸上自衛隊の中央音楽隊による両国国歌の演奏があり、続いて栄誉礼をお受けになる。国賓は自衛隊の儀仗隊をご巡閲され、日本側の政府関係者のごあいさつを受けられる。その後、場所を移して「正殿竹の間」でご会見になり、親しくお話し合いになる。その日の夜には、両陛下主催の宮中晩餐が催される。まず、両陛下が宮殿南車寄（玄関のこと）で国賓ご夫妻をお迎えになり、「松風の間」で皇族方をご紹介、続いて「石橋の間」で両陛下と国賓ご夫妻が並ばれた前を、招待客が一人ずつ通ってごあいさつをされる。その後、「豊明殿」でフランス料理による晩餐が供される。晩餐では天皇陛下の歓迎のお言葉、賓客のご答辞がある。食後は両陛下と国賓ご夫妻は「石橋の間」に移られ、招待客は「春秋の間」に移動して食後酒やコーヒーが供される。続いて両陛下と国賓ご夫妻は「春秋の間」に移られ、招待客とご歓談、最後に両陛下が国賓ご夫妻をお見送りされる。国賓のご退京に際しては、両陛下が宿舎（多くは迎賓館赤坂離宮）へご訪問になり、お別れのごあいさつを交わされる。

公賓は、外国王族や行政府の長あるいはこれに準じる方が迎えられる。両陛下はご引見された賓客と親しくお話になり、時宜により宮中午餐を催される。このほか、平成になってから公式実務訪問賓客をお迎えするようになり、これは外国の元首、王族、行政府の長あるいはこれに準じる方で、実務を目的に来日される賓客のことで、時宜により両陛下はご会見、ご引見になり宮中午餐を催される。これらの招聘と接遇の内容は、賓客に応じて閣議を経て決定されている。このほかのご訪問であっても、天皇陛下は来日された元首や王族の方々とお会いになって親しくお話になり、ご夫妻での来日の場合は皇后陛下もその場に同席される。こうしたご接遇をはじめとする国際親善のご公務を、両陛下は日々心を込めてお務めされている。

昭和天皇と香淳皇后のご接遇の歩み

現在のような皇室による外国賓客のご接遇は、戦争という各国と親善を重ねるには困難な時期を経て、昭和27年9月にサンフランシスコで平和条約が締結され、日本国民の主権が回復されたことを契機に準備が進められた。まずは、皇室の様々な行事が行われ、賓客を正式にお迎えしていた宮殿（現在の宮殿に対して明治宮殿と呼ばれている）が戦災で焼失したため、昭和10年に建てられた宮内庁の庁舎3階が改装され、仮宮殿として使用されることとなった。そし

昭和31年11月エチオピア帝国皇帝とご会見

告別の午餐の折にご贈進を受ける

て、昭和28年11月には、アメリカ合衆国アイゼンハワー大統領の特派親善使節として、ニクソン副大統領夫妻が戦後最初の国賓として来日された。この時の来日は、現在の公賓と同じ接遇の内容でお迎えされ、昭和天皇と香淳皇后は儀装馬車で皇居に参入した夫妻にお会いになり、宮中午餐に夫妻をお招きになった。この時、大統領の親書と署名入りの写真をお受けになっている。この国賓をお迎えした後、12月には国賓の待遇に関する取扱いが、外務省および宮内庁、総理府の間で協議、正式に決定されている。このときの内容は、国賓の接遇は閣議決定によること、皇室による接遇と政府側の接遇に分けて待遇するという基本は今日と変わりはないが、皇室の接遇としてその待遇振りは甲、乙、丙の3種に分けられ、例えば甲は元首の接遇例として、現在の国賓の接遇に当たる内容になっている。国賓送迎のため空港への行幸あるいは行幸啓があること、ご会見の後に答礼として宿舎へ行幸があること、皇居への出入りに儀装馬車の規模を盛大にするなど、今日とは異なる点も含まれる。この待遇要項は、その後、国際関係の緊密化にともない外国賓客の来日が頻繁になっていることを理由に、昭和39年6月に改正され、公賓の制度が設けられ、その接遇の内容は当時の国際慣行を基準に協議して決定されることとなった。さらに、昭和59年3月には公式実務訪問賓客の制度が設けられ、平成元年から実際に公式実務訪問による賓客をお迎えしている。このように、制度自体も、接遇の内容も実状にあわせて変遷を経て今日に至っている。

本展で紹介している作品で最も遡るのは、昭和29年12月に来日されたセイロン国(現スリランカ)のジョン・コテラワラ首相で、戦後3人目の国賓である。この時の接遇は、現行の公賓と同じ内容でお迎えされ、昭和天皇と香淳皇后は首相とお会いになり、午餐に招かれた。同首相からは昭和天皇には銀製盆(作品番号1)、香淳皇后には銀製蝋燭立(作品番号2)が贈られた。特に蝋燭立は、変色や蝋の付着が見られ、お身近に置かれて実際にお使いになっていたようである。

昭和30年12月、王族の国賓として初めてカンボジア王国の前国王シアヌーク殿下が来日された。シアヌーク殿下は昭和28年にも来日されて昭和天皇と会見されており、この来日では香淳皇后と王妹のラシミ・ソパン殿下もともに会見の場に同席され、午餐が催された。

そして、国の元首として初めてお迎えした国賓が、昭和31年11月に来日したエチオピア帝国皇帝ハイレ・セラシエ一世である。仮宮殿で初めて宮中晩餐が行われるなど、その接遇がどのように行われるのか、国内の注目を集めた来日でもあった。ハイレ・セラシエ一世は皇女(長女)、皇子(次男)、皇孫(長女の令嬢)を同伴されての来日で、日本に到着された11月20日は昭和天皇が羽田空港までお出迎えされた。空港での歓迎行事の後、昭和天皇は皇帝と皇居までご同車になった。仮宮殿でのご会見があり、当日は国賓の宿舎まで答訪として行幸され、この時、昭和天皇は皇帝に勲章をご贈進になった。宮中晩餐の後は雅楽の演奏が催され、童舞「胡蝶」をおそろいで鑑賞された。翌日は午前中、昭和天皇は行幸されなかったが、埼玉鴨場での鴨猟、午後は宮中茶会、夜には旧高松宮邸である光輪閣で皇帝主催の晩餐会が行われた。その後、国賓一行は政府側の接遇を受けて残りのご日程を過ごされた。帰国を前にして、27日には天皇皇后主催によるお別れの宮中午餐が開かれ、この折りに昭和天皇が皇帝よりお受取りになったのが「金

昭和38年11月ドイツ連邦共和国大統領をお迎えしての宮中晩餐

昭和49年11月アメリカ合衆国大統領とご会見

銀製果物盛鉢」(作品番号3)である。皇帝が自らこの贈り物を手に昭和天皇に解説をされる写真がある。

このようにエチオピア皇帝を、初めて元首の国賓としてお迎えして後、昭和33年5月にはイラン帝国のパハラヴィー皇帝が、続いて同年9月にはインド国のプラサド大統領、35年4月にはネパール王国のマヘンドラ国王王妃が来日され(作品番号6「孔雀置物」)、これらの答礼として皇太子同妃でいらっしゃった天皇皇后両陛下は、昭和天皇のご名代として初めて昭和35年11月12日から12月9日までのご日程でこの4か国をご訪問になった。なお、この答礼訪問の1か月前、天皇皇后両陛下はご成婚後、お二人での初めての外国ご訪問として、日米修好100年を機に国際親善のためアメリカ合衆国を訪問されている。この昭和35年以降、昭和の時代を通じて、両陛下は皇太子同妃としてご招待を受けての外国ご訪問と、昭和天皇のご名代としての答礼による外国ご訪問を度重ねられ、国際親善に尽くされることになる。

昭和38年11月に来日されたドイツ連邦共和国のリュプケ大統領夫妻は、ヨーロッパ諸国の元首の国賓としては初めて来日された。11月6日に到着され、その当日に昭和天皇と香淳皇后とご会見、宮中晩餐と続いての夜会、8日にはドイツ大使館において大統領主催の晩餐会が催された。翌9日には昭和天皇と香淳皇后は大統領夫妻とご一緒に竣工後まもない日生劇場へ行幸啓され、歌舞伎を観劇された。この来日で受け取られたのがニンフェンブルク窯で作られた「色絵金彩東屋に人物置物」(作品番号7)である。大統領夫妻は東京を離れて後、京都や奈良、大阪を訪問、各地の文化財や史跡を視察された。

昭和43年には最初の国賓をお迎えしてから15年を経て、現在の宮殿(新宮殿)が完成し、翌年の4月に国賓として来日されたアフガニスタン王国ザヒール・シャー国王王妃とのご会見は、初めて新宮殿の「竹の間」で行われた。さらにこの5年後の昭和49年4月には賓客の宿舎として赤坂離宮が改修され、迎賓館として使用されるようになった。ちなみに、外国賓客がお泊まりになる宿舎は、国賓をお迎えした当初は大使館やホテルが使用されていたが、昭和30年4月には、昭和8年に建築された美しいアールデコ様式で知られる旧朝香宮邸(現在の東京都庭園美術館)が白金迎賓館として整備され開館、外国賓客の宿舎としてしばらく使用された。迎賓館赤坂離宮は東宮御所として明治39年に建物が竣工、42年には外構を含めた全体が完成した宮殿である。技監の片山東熊を筆頭に、国内の優れた一流の建築家、美術家らが参加、その技を結集して10年の歳月をかけて完成された。大正天皇はこのネオバロック様式の壮麗な建物に東宮御所としてお住まいになることはなかったが、昭和天皇は大正12年から、翌年にはご成婚になり新婚時代を過ごされ、昭和3年に宮城(明治宮殿)に移られるまで、ここでお住まいになった。

この赤坂離宮を宿舎として初めてご使用になったのは、昭和49年11月に来日されたベルギー王国ボードワン国王ファビオラ王妃であった。同国王と王妃は、昭和39年に国賓として来日されており、2回目の来日であった。昭和39年の最初のご訪問の折に、贈られたのが「色絵花卉文食器セット」(作品番号8)で、同国のトゥルネー窯で18世紀に作られたものである。2回目の来日は非公式であったが、昭和天皇と香淳皇后は空港まで行幸啓されて国王王妃をお出迎えになり、再会を喜ばれた。最初のご訪問時には仮宮殿でお迎えしたこともあり、新宮殿をご案内、晩餐を共に

昭和55年4月スウェーデン国王王妃両陛下とご一緒に宮殿「石橋の間」で宮中晩餐の招待客をお迎えになる

昭和59年9月大韓民国大統領と雅楽を御覧に

された。侍従長を務めた入江相政の日記『入江相政日記』にはこの時のことを「昭和49年11月2日（中略）夜両陛下皇居へおいで。宮殿を最高にほめて下さった。すっかり終わったのは零時前。すべてお着きが一時間遅れになったことから来たこと。でも両国の皇后さま、お手をつないで宮殿をおあるきになり大変良かった。」と記している。ベルギーの国王王妃が帰国された後、この同月、アメリカ合衆国フォード大統領が来日、国賓として初めて赤坂離宮を宿舎として使用された。歓迎行事が赤坂離宮の前庭で行われるようになったのもこれ以降のことである。この来日の折に受けとられたのが、セコイア（アメリカスギ）が表された「三角柱ガラス置物」（作品番号13）である。この来日に対しては、翌年に昭和天皇と香淳皇后のアメリカ合衆国ご訪問が実現することとなった。

同じ昭和50年には、英国女王エリザベス二世陛下と王配エディンバラ公フィリップ殿下が初めて来日された。これは、昭和46年に昭和天皇と香淳皇后がお二人での初めて外国ご訪問の折に、訪英されたことに対する答礼として実現された来日であった。年々、外国賓客が増える一方で、昭和天皇と香淳皇后の外国ご訪問はなかなか実現されなかったが、昭和46年秋にはアメリカ合衆国アンカレッジにお立ち寄りになった後、ヨーロッパ7か国をデンマーク王国、ベルギー王国、フランス共和国、英国、オランダ王国、スイス連邦、ドイツ連邦共和国の順に歴訪された。このうち、公式にご訪問されたのはベルギー王国、英国、ドイツ連邦共和国の3か国であり、来日された元首、王族方に対する答礼、国際親善のためのご訪問であった。香淳皇后にとっては初めての外国ご訪問となった。

英国女王陛下をお迎えした迎賓館での歓迎行事では、香淳皇后は、昭和46年の訪英時に女王陛下から受けとられたブローチ（当館蔵）を着装される、という配慮を示されていた。この時、日本と縁の深い陶芸家、バーナード・リーチの「天目釉抜絵巡礼者文皿」（作品番号14）が昭和天皇へ、やはりリーチの作品でエッチングによる「手賀沼　我孫子」（作品番号15）が香淳皇后に贈られた。

中華人民共和国と大韓民国との国交もこの昭和50年代に急速に回復された。昭和53年には、公賓として中華人民共和国国務院副総理である鄧小平夫妻が来日された。鄧副総理の来日は、日中平和条約批准書を取り交わすことがその大きな目的で、首相官邸で批准書が取り交わされた後、皇居を訪問、昭和天皇と香淳皇后は夫妻とお会いになり、午餐を共にされた。竹の間でのご会見で交わされたやり取りとして、『入江相政日記』には「昭和53年10月23日（中略）竹の間で「不幸な時代もありましたが」と御発言。鄧氏は「今のお言葉には感動致しました」と。これは一種のハプニング。」と記されている。この時、受けとられたのが水墨により百匹近くの驢馬が描かれた画巻「百驢図」（作品番号18）である。また、昭和59年、国賓として大韓民国の全斗煥大統領夫妻の来日は、同国からの初めての公式来日であり、これを機に両国の交流が大きく図られたといえよう。この時に受けとられたのが、吉祥図を伝統刺繍で表した「十長生図刺繍屏風」（作品番号23）であった。

昭和天皇は昭和62年4月に体調を崩されて、9月に手術を受けられてからは、皇太子として天皇陛下が宮中晩餐の代理を務められるなどご接遇の内容にも変更があったが、昭和63年6月に国賓として来日されたセネガル共和国大統領とご会見、崩御される前年まで、その務めを果たされた。この昭和最後の国賓から受けとられた品が綴織の壁掛

け「シーヌの夜」(作品番号30)である。香淳皇后は、昭和52年7月に腰を痛められてから、次第に公式の場に姿をお見せになることが少なくなったが、昭和56年頃まではご会見やご引見に同席されて、昭和天皇を支えられた。

昭和天皇が実際に公式にお迎えした国賓、公賓は合わせて167件にのぼる(44～46頁に国賓・公賓の表を掲載)。外国ご訪問やご病気の時以外のほとんどの国賓、公賓に昭和天皇はお会いになり、お言葉を交わされ、宮中晩餐、午餐にお招きになっている。この他にも来日された元首や王族方は160件あり、たくさんの外国賓客の方々とお会いになり、お言葉を交わされて、そのご接遇に尽くされた。本展で紹介の、ご接遇を通じて受けとられたこれらの品々は、お写真や作品の様子から、実際にお使いになったり、お身近にお飾りになって大切にされていたようである。

戦後の復興とその後の経済成長の中で、昭和天皇と香淳皇后が共に歩まれ、重ねられてきたご接遇と外国ご訪問は、今日、平成の皇室の国際親善の広がり、そのご活動の奥深さの基礎を築かれたものであった。

五味聖(ごみひかる／当館学芸室研究員)

昭和63年4月ベネズエラ共和国大統領とご会見

参考文献

『改訂 儀礼軌範』外務大臣官房儀典長室　昭和41年

『宮内庁要覧』(平成17年度版)

『おほうなばら　昭和天皇御製集』宮内庁侍従職、平成2年

『入江相政日記』朝日新聞社、平成2年

『卜部亮吾侍従日記』朝日新聞社、平成19年

1
銀製盆　1点

1954年
銀・鍛造
D.51.0　H.2.2

2
銀製蝋燭立　1対

1954年
銀・鋳造
D.10.5 × W.10.5 × H.34.5

昭和29年（1954）、国賓として来日のセイロン国（現スリランカ民主社会主義共和国）首相より

1
Silver decorated tray

1954
hammered silver

2
Pair of silver candle sticks

1954
cast silver

gift from Prime Minister of Ceylon (present Democratic Socialist Republic of Sri Lanka), when visiting Japan as State Guest in 1954

この銀製盆と蝋燭立は、いずれも昭和29年12月に国賓として来日されたセイロン（現スリランカ）のジョン・コテラワラ首相（在職1953−56）より贈られた品で、それを示すサインと1954年の年号が刻まれている。セイロンは、紀元前3世紀に仏教が伝えられてより後、永きにわたり歴代王朝の庇護を受けて仏教文化が栄えた地である。各地に壮麗な寺院が建立され、今日、それらの多くが文化遺産として大切に護られている。銀製盆は寺院や塔の入口に据え置かれた、ムーンストーンと呼ばれている半月形の踏み石の装飾を模して作られたものである。礼拝者はムーンストーンの前で裸足になり、石を踏んで足を清めてから参入するという。そこに刻まれた文様は、最も外側は炎を、その内側の動物のうち象は誕生、馬は老い、ライオンは病、雄牛は死を意味し、花をくわえた水鳥は純潔を、中央の蓮花は死後の世界を表し、全体で輪廻を表しているとされる。蝋燭立も、寺院建築の柱などの装飾を引用していると考えられる。いずれも古代以来の同国の文化に根付く造形を、伝統的な金工技術によって表した作品である。銀製盆は昭和天皇に、蝋燭立は香淳皇后に贈られた。

3
金銀製果物盛鉢　1点

20世紀半ば頃
金、銀
D.40.0 × W.37.0 × H.24.5

昭和31年（1956）、国賓として来日のエチオピア帝国皇帝ハイレ・セラシエ一世より

Gold and silver fruit bowl

mid 20th c.
gold, silver

gift from Emperor Haile Selassie I of Ethiopia, when visiting Japan as State Guest in 1956

金と銀の細やかな線で細工された果物鉢である。16弁の花形に銀で枠を作り、その枠の中に金銀の線細工が嵌め込まれている。器の上部には、金による小花を中心とした円形の飾りを嵌め、その下には銀による8弁の小花とペーズリー文様が華やかに施される。繊細な透かし模様、立体的に形作られた花の造形にはエチオピアの金工細工の優れた技術が看て取れる。見込みには、王冠と文字を組み合わせた紋章が嵌め込まれている。

昭和31年のエチオピア帝国皇帝ハイレ・セラシエ一世（在位1930–74）の来日は、国賓としては初めて元首をお迎えしたもので、現在の国賓と同じ接遇様式で行われた。現在の宮内庁庁舎3階に設置された仮宮殿で初めて宮中晩餐が催されるなど、接遇の様子や内容は当時の大きな話題となった。ハイレ・セラシエ一世の帰国を前に催された午餐の折に、皇帝自ら本作を手に昭和天皇に説明する姿が写真に残されている。なお、この時、香淳皇后へは同じく金線細工によるハンドバックが贈られている。この来日に対して、昭和天皇のご名代として天皇皇后両陛下が昭和35年に同国を答訪された。

全体

4

象牙製チェスの駒　1式

20世紀半ば頃
象牙
D.5.3×W.5.3×H.11.5～
D.1.8×W.3.6×H.6.2

昭和32年(1957)、国賓として来日のインド国首相より

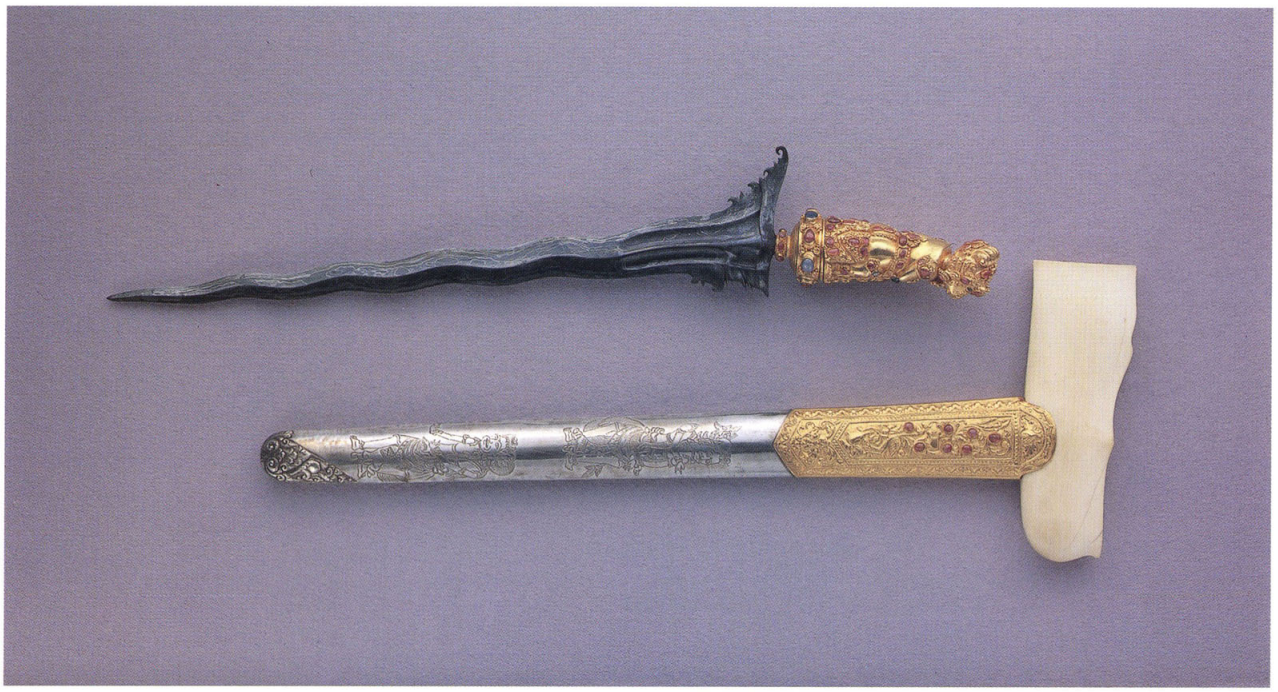
Set of ivory chess pieces

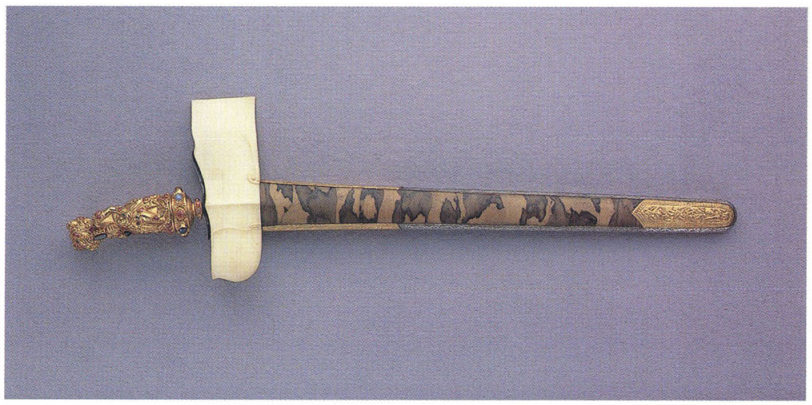
mid 20th c.
ivory

gift from Prime Minister of India, when visiting Japan as State Guest in 1957

チェスの起源は、チャトランガとよばれる古代インドのボードゲームに遡るとされる。これは象や馬、戦車、歩兵の4種で構成された軍隊の駒を進めるものである。本作は、このインド古来のボードゲームを想起させるチェスの駒で、騎象の王や貴人をはじめ、旗を持って象、馬、駱駝に乗る騎兵、剣を構える歩兵の6種の駒で構成されている。先手の白駒と後手の黒駒は同じ形をしているが、黒駒の下部側面が黒に塗られて区別されている。白く上質の象牙を細かく彫りだしており、優れた工芸技術で人や動物が生き生きととらえられている。なお、チェス盤は本作には伴っていない。

昭和32年10月に来日されたインド国首相ジャワハルラール・ネルー(在職1947–64)より贈られた品である。この時、ネルー首相はその一人娘で、後にやはり同国の首相を務めることになるインディラを伴っての来日であった。





裏面

5
金装短刀　1振

20世紀前半
金、銀、象牙、貴石
L.69.3

昭和33年(1958)、来日のインドネシア共和国大統領より

Gold decorated short sword

early 20th c.
gold, silver, ivory, gems

gift from President of Republic of Indonesia, when visiting Japan in 1958

クリスと呼ばれる短刀で、インドネシアをはじめマレーシア、ブルネイ、タイ南部などに見られる独特の形態をもつ。刃は細く、根本は幅広く作られて左右非対称となっており、刃の形態には様々なものがある。本作の刃は波形に作られ、数種類の鋼の合金を層状に重ねて鍛造し、美しい波紋が表されている。鞘は木製で、鞘口には象牙を用い、金銀の板を巻いて、赤色の貴石を嵌めて彫金で装飾し、武将の姿を線刻している。把は金を打ち出して、鏡を持つ武将の姿が形作られ、赤や青の貴石が嵌め込まれている。

クリスはインドネシアでは古くから男性が日常的に身につけてきたもので、背面で帯に挿して着装し、今日でも式典などの正装の時には欠かせない。クリスの装飾には神話や伝説が取り入れられるが、優れた品はその家々で神聖なお守りとして受け継がれており、精神的にも社会的にも重要な意味合いをもつ刀である。昭和33年1月に来日された同国スカルノ大統領(在職1945−67)からの品である。この来日は非公式のものであったが、当時の国賓と同じ接遇様式で迎えられた。

6
孔雀置物　1対

19世紀後半
貴石、珊瑚・彫金
D.19.5 × W.35.0 × H.49.5

昭和35年(1960)、国賓として来日のネパール王国国王マヘンドラ、王妃ラトナより

Pair of peacocks

late 19th c.
gems, corral · metalwork

gift from King Mahendra and Queen Ratna of Kingdom of Nepal, when visiting Japan as State Guests in 1960

細やかな金属線の細工に、珊瑚やトルコ石などの貴石をふんだんに象嵌した孔雀の置物。玉をくわえる孔雀の首や胴、尾羽、台座の各部は、金属を基盤にそれぞれの部材に分けて作られ、1体に組み上げられている。台座の四側面に宝冠をつけた四臂の観音像を取り付け、こちらにも同様の華やかな装飾が施されており、ネパールの優れた金工技術を伝える作品である。金属の変色や各部に補修された痕が見受けられることから、その制作は19世紀まで遡るかと考えられる。

孔雀はその美しい羽を広げた姿から様々な装飾に取り入れられている。特に仏教では孔雀は毒虫や蛇を食べることから、災いから守るものとして経典にも説かれ、孔雀明王として尊崇される対象ともなっている。ネパールは仏教やヒンドゥー教の文化が中心となっており、本作はその華麗な装飾から、ヒンドゥー教の影響を受けて制作された置物であろう。昭和35年4月に国賓として来日されたネパール王国国王マヘンドラ、王妃ラトナ(在位1955–72)より香淳皇后へ贈られた品である。なおこの来日に対しては、同年の11月に天皇皇后両陛下(当時は皇太子同妃)が昭和天皇のご名代としてネパールを答訪された。

部分

7
ニンフェンブルク窯
色絵金彩東屋に人物置物　1点
1960年／陶磁
D.21.0 × W.26.5 × H.36.8

昭和38年（1963）、国賓として来日のドイツ連邦共和国大統領夫妻より

Nymphenburg
Human figures in an arbor, gold and polychrome glaze
1960／ceramic

gift from President of Federal Republic of Germany and his wife, when visiting Japan as State Guests in 1963

ニンフェンブルク窯は、1747年にドイツ南東部からオーストリアを治めていたマキシミリアン3世ヨーゼフによって、ミュンヘン郊外のノイデックにバイエルン公国の御用窯として設立された。その後、1761年に同窯はニンフェンブルクにあるヴィッテルスバッハ家の夏の離宮に移され、原型作者としてフランツ・アントン・ブステリを迎え、イタリア喜劇をモチーフとするコメディア・デラルテの人形を発表し、そのロココ様式を代表する軽妙洒脱な造形の磁器で、マイセンとともに名声を高めた。本作品もその伝統を引き継いだ磁器人形である。屋根に翼竜の留まる東屋風の建物に、バランスよく配された弦楽器奏者、パイプをくわえた人物、籠を担ぐ人、果実をもつ人が、色絵と金彩によって華やかに彩られている。ドイツ連邦共和国大統領ハインリッヒ・リュプケ（在職1959−69）夫妻より香淳皇后へ贈られた。

8
トゥルネー窯
色絵花卉文食器セット
28点のうち

1760年頃／陶磁
丸型：D.23.5 H.3.5、D.24.5 H.2.5、
角型：D.20.0×W.20.0×H.3.0

昭和39年（1964）、国賓として来日のベルギー王国国王ボードワン、王妃ファビオラより

Tournai
Tableware with floral design, polychrome
c.1760／ceramic

gift from King Baudouin and Queen Fabiola of Kingdom of Belgium, when visiting Japan as State Guests in 1964

トゥルネーは、ベルギーのワロン地域に所在し、フランス国境に近いベルギー最古の町として知られる。1750年に同地がオーストリア領であった時期に、総督であったロレーヌ侯シャルルの発意を受けて、フランソワ・ジョセフ・ペーテルリンクにより製陶所が設立された。本作は、16～17世紀にかけて東洋の磁器がヨーロッパで珍重された時代を経て、18世紀に欧州各地で磁器制作が試み始められた頃の貴重な作例である。この時代の西洋陶磁の特徴である軟質陶土を材料としており、やや柔らかみが感じられる器である。後の時代の磁器のような均質な完成度の高さはないものの、大きな歪みもなく、かなり精巧な器形で揃えられている。また、一枚ずつ異なる写実的な花々が手描きで絵付けされており、マイセンなど同時代の西洋陶磁と同様の装飾傾向が見られる。ベルギー王国国王ボードワン（在位1951－93）、王妃ファビオラより香淳皇后へ贈られたもので、全28点のうち、円形の平皿が24点、円形の深皿が2点、角形の深皿が2点である。

9

カット・ガラス食器セット

26点のうち

20世紀後半／ガラス
大鉢: D.25.5 H.11.3、小鉢: D.11.5 H.7.3
皿: D.16.7 H.3.1

昭和43年(1968)、国賓として来日のユーゴスラビア社会主義連邦共和国大統領夫妻より

Cut glass tableware

late 20th c.／glass

gift from President of Socialist Federal Republic of Yugoslavia and his wife, when visiting Japan as State Guests in 1968

旧ユーゴスラビア(現在のスロベニア)のロガーシュカ・スラティナ地方は、温泉のあるヨーロッパ屈指の保養地として知られ、17世紀頃よりヨーロッパの王族や貴族階級が訪れる土地であった。そこから湧き出る天然鉱水は癒しの効果をもたらす水としても、ヨーロッパに広く知られていた。また、ロガーシュカ・スラティナ地方では、記録によると1665年まで制作年代が遡るガラス製造技術があり、もともとはこの天然鉱水を入れるためのガラス瓶として発達したものであると伝えられている。本作品は、第二次世界大戦後の近代化を経ながら、同地方で受け継がれたガラス製造技術による、カット・ガラスの食器である。純度の高い薄い紫色の色ガラスが用いられており、小鉢と大鉢では厚みが異なるため、その色合いも濃淡を見せている。一点ずつ手作業で刻まれた模様は繊細で手が込んでおり、スロベニアのガラス加工技術の高さを物語っている。ユーゴスラビア社会主義連邦共和国大統領ヨシップ・ブロズ・チトー(在職1953−80)夫妻より香淳皇后へ贈られたもので、全26点のうち、大鉢が2点、小鉢が12点、小皿が12点である。

部分

10
金装刀　1振

20世紀後半
金、ダイヤモンドほか
L.98.0

昭和46年(1971) 国賓として来日のサウジアラビア王国国王ファイサルより

Gold decorated sword

late 20th c.
gold, diamond, etc.

gift from King Faisal of Kingdom of Saudi Arabia, when visiting Japan as State Guest in 1971

この刀は湾曲した片刃のもので、外装は鞘を金属板で包み、柄はL字に折れた形に作られており、アラビア半島の諸国に見られる刀装に特徴的な形式を持っている。鞘は金地に蔓草を、吊金具の取り付け部分には花紋を彫り、鞘口に近い部分にダイヤを嵌め、その脇にサウジアラビア王家の紋章であり、同国の国章でもある交差する二本の刀とヤシの木が、トルコ石やルビーなどの宝石を象嵌して表されている。二本の刀は力と忍耐を表し、ヤシの木は生命力、成長、繁栄を象徴しているという。柄は金の細かな粒を連続して配置し、細かな文様を彫り表し、柄頭と鐔の部分は鎖で繋がれ、金のコインがひとつ付けられている。当館にはこの他、同国やヨルダン、カタールなどから贈られた華やかな外装の刀が幾つか伝えられており、この地域では刀が友好の形として贈りものに選ばれていることが示されている。昭和46年5月に国賓として来日されたサウジアラビア王国国王ファイサル・イブン・アブドル・アジーズ・アーリ・サウード(在位1964−75)より贈られた。

11
獅子置物　1点

20世紀後半
ラピスラズリ
D.5.0 × W.10.0 × H.6.5

昭和47年（1972）、公賓として来日のアフガニスタン王国王女ビルキス殿下、同夫君サンダル・アブドル・ワリ殿下より

Lion

late 20th c.
lapis lazuli

gift from Princess Bilquis of Kingdom of Afghanistan and her husband Sardar Abdul Wali, when visiting Japan as Official Guests in 1972

ラピスラズリと呼ばれる、深い青色をした貴石を獅子の形に彫り出した置物。ラピスラズリは鉱物、青金石（せいきんせき）（ラズライト）を主成分とするもので、ラピスはラテン語で「石」、ラズリはアラビア語で「青」や「空」を意味する。古代よりアフガニスタンの北東部バダフシャン地方で採掘され、世界各地へ運ばれて珍重された。正倉院宝物にもラピスラズリで装飾した「紺玉帯」が伝えられている。また、ラピスラズリを細かく砕いて作られた群青色の顔料は、時を経ても色あせることなく、美しい青を表す貴重な顔料として古くより絵画に使用され、19世紀にヨーロッパで人工的に青色の顔料が作られるようになるまで、非常に高価なものであった。今日でもラピスラズリの産地は、シベリアやチリ、アメリカのコロラド州など限られており、アフガニスタンが最大の産出国の一つとなっている。

我が国は昭和44年4月にアフガニスタン王国国王モハメッド・ザヒール・シャー王妃ホマイラ両陛下を国賓としてお迎えしており、46年6月には天皇皇后両陛下が昭和天皇のご名代としてご答訪されて交流を深められた。本作はその翌年11月に公賓として来日された王女ビルキス殿下、同夫君サンダル・アブドル・ワリ殿下より贈られた品である。

12
真鍮製飾花瓶　1点

20世紀後半
真鍮・鋳造
D.20.0 × W.32.5 × H.57.5

昭和48年(1973)、来日のカメルーン共和国大統領夫妻より

Brass decorated vase

late 20th c.
cast brass

gift from President of Republic of Cameroon and his wife, when visiting Japan in 1973

上部には、瓢箪や食物を載せた器を抱える人々が腰掛け、胴部上段には羚羊(アンテロープ)を狩猟する人々と首をもたげたトカゲ、下段にはヘビやクモ、カエルが配された装飾的な花瓶である。脚部には対の手足がついており、花瓶自体がまるで一つの生命体であるかのようである。

本作品は、多くの部族が住むカメルーン国内で、最大規模の伝統王国の一つであるバムン王国の王家に属する真鍮鋳造の職務集団によって製作されたものである。バムン王国は、およそ200年の歴史をもつとされ、カメルーン西部の都市フンバンに王宮を築いて、現在も王統を維持している。かつて真鍮製品は王家のみに所有を許されていたが、20世紀には開放され現在は観光客向けの製品も製作されている。しかし、本作品の胴部と脚部をつなぐ部分には、両頭のヘビを手に持つ王の顔が3面に表されているほか、器体自体の文様や、人物などの意匠それぞれの表情が細部まで丁寧に表され、この種の作例のなかで最高級の作品とみられる。共和国としては歴史が新しいカメルーンの伝統的な工芸品を代表するものであり、日本の皇室に贈るに相応しい品として選ばれたものであろう。

カメルーン共和国の初代大統領であるアマドゥ・アヒジョ大統領(在職1960−82)は、昭和48年4月に日本を訪れた。この来日は非公式であったが、昭和天皇と香淳皇后は大統領夫妻と御会見され、午餐に招かれている。

13
スチューベン・グラス
三角柱ガラス置物　1点
1974年／ガラス
D.10.0 × W.11.5 × H.35.0
昭和49年（1974）、国賓として来日のアメリカ合衆国大統領より

Steuben Glass
Glass triangular prism
1974／glass
gift from President of the United States of America, when visiting Japan as State Guest in 1974

スチューベン・グラスは、1903年に米国ニューヨーク州に設立され、現在に至るまで高品質のクリスタルガラスを制作している。1947年にトルーマン大統領が英国王女エリザベス殿下（当時）の御成婚祝いとして、スチューベンのクリスタルガラスを贈呈して以来、米国歴代大統領の公式贈呈品に用いられている。本作は、三角柱形に成形された純度の高いクリスタルガラスで、各側面に米国の代表的な樹木であるセコイア（アメリカスギ）がエングレーヴィング技法（回転する銅盤に金剛砂をまぶしながらガラスを研削して文様を表す技法）で表されている。他の側面のセコイアの図様が重なり合って見えるため、クリスタルの冷たい透明感の中に、まるで杉林のような幻想的な空間が生み出されている。国賓として来日した米国大統領ジェラルド・R・フォード（在職1974−77）より昭和天皇、香淳皇后へ贈られた。米国大統領の来日、併せて国賓の迎賓館宿泊は、これが初めての機会であった。翌年、昭和天皇、香淳皇后は大統領の招待を受けられ、国際親善のために米国をご訪問になった。

14
バーナード・リーチ
天目釉抜絵巡礼者文皿　1点
1970年頃／陶磁／D.31.8、H.6.5
昭和50年（1975）、国賓として来日の英国女王エリザベス二世陛下、王配エディンバラ公フィリップ殿下より

Bernard Leach
Dish with pilgrim design in wax resist technique, *tenmoku* glaze
c.1970／ceramic
gift from H.M. the Queen Elizabeth II and H.R.H. the Prince Philip, Duke of Edinburgh, of United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland, when visiting Japan as State Guests in 1975

イギリスを代表する陶芸家であるバーナード・リーチ（1887～1979）は、美術家を志した青年期に日本を訪れて、楽焼体験からやきもの作りの面白さに魅せられることとなった。香港に生まれ、東洋の文化に強い憧れと関心を持っていたリーチは、華美な装飾が好まれたヴィクトリア時代のイギリス文化とは対照的に、素朴でどっしりとした力強い造形をもちつつも、抑制された静謐な美のあり方を求めた。この艶やかな天目釉を用いた器も、日本人にはとても親しみやすい落ち着いた味わいがある。見込みに抜絵の技法によって、ぼんやりと浮かび上がるように表された巡礼者（pilgrim）の姿には、西洋と東洋の文化を往来し、創作活動のうちに真理を求め続けたリーチ自身の姿が投影されている。英国女王エリザベス二世陛下（在位1952－　）、王配エディンバラ公フィリップ殿下より昭和天皇へ贈られた。

15
バーナード・リーチ
手賀沼 我孫子　1点
1918年／紙・エッチング
本紙23.6×16.4

昭和50年（1975）、国賓として来日の英国女王エリザベス二世陛下、王配エディンバラ公フィリップ殿下より

Bernard Leach
Teganuma Lake in Abiko
1918／etching on paper

gift from H.M. the Queen Elizabeth II and H.R.H. the Prince Philip, Duke of Edinburgh, of United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland, when visiting Japan as State Guests in 1975

陶芸家バーナード・リーチは、もともとロンドン美術学校でフランク・ブラングィンからエッチング（銅版画の技法）を学んだ経験があり、明治42年（1909）に再来日した当初、雑誌『白樺』を創刊する作家を中心に自作の披露や教授を行っている。陶芸制作へ本格的に転向したのちも、エッチングの制作はしばらく続けられた。スケッチと同様、描く対象を素早い線描で写し取りながら、自身のスタイルで表現することに長けており、やきものの絵付けにもその卓越した画技を見て取ることができる。本図は、これまでの回顧展で「手賀沼 我孫子」として紹介されてきたエッチング作品と、同じ原板から摺られたものであると思われる。日没間近の千葉県我孫子の手賀沼のほとりで、漁師が魚を入れた籠を舟に引き上げようとする姿を、インクの濃淡で薄暗い画面に仕上げている。画面左下には「Leach '18」のサインと制作年が入る。本図制作の前年に、リーチは我孫子にあった柳宗悦邸の敷地内に、窯と仕事場を築いていた。本紙下辺の余白には、鉛筆で「The Lagoon, Japan.」、「Bernard Leach」と記されている。英国女王エリザベス二世陛下、王配エディンバラ公フィリップ殿下より香淳皇后へ贈られた。

16
ルネ・ジェニ
白い道 (La Route Blanche)
1点

1970年代前半／キャンバス・油彩
本紙59.3×36.5

昭和51年(1976)、公賓として来日のフランス共和国首相夫妻より

René Genis
The White Road
early 1970's／oil on canvas

gift from President of French Republic and his wife, when visiting Japan as Official Guests in 1976

©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2010

本図は、タイトル「白い道」の通り、土手と木々の間をなだらかに蛇行して、画面手前から奥へと続く白い舗装路が描かれている。20世紀初頭よりフランスで展開したフォービスムの影響のうかがえる木々の濃緑と白い道との明快な色彩対比や、油絵具を盛り上げるように描く作者特有の力強い筆遣いが目を引く。作者のルネ・ジェニ(1922～2004)は、風景画や静物画を得意としたフランス人画家である。フランスのボルドー出身のインドシナ系フランス人を両親に持ち、1922年にベトナムのフエに生まれた。1931年に両親の母国フランスに居を移し、ボルドーの美術学校(the Ecole des Beaux-Arts)、そしてパリの装飾美術学校(the Ecole des Arts Decoratifs)で絵を学んだことが知られ、1959年よりパリやニューヨークで精力的に個展を開催した。

昭和51年、公賓として来日のフランス共和国首相ジャック・シラク(在職1974−76)夫妻より香淳皇后へ贈られた品。

17
貝の灰皿　2点

20世紀後半
シロチョウガイ、オウムガイ、真珠、珊瑚ほか
大：D.19.0×W.18.8×H.5.5
小：D.13.5×W.8.0×H.5.5

昭和52年（1977）、国賓として来日のフィリピン共和国大統領夫妻より

Shell ashtrays

late 20th c.
Silver-lipped pearl oyster, nautilidae, pearl, corral, etc.

gift from President of Republic of the Philippines and his wife, when visiting Japan as State Guests in 1977

海洋に囲まれたフィリピンでは、豊かな海産物を用いた工芸品が盛んに作られている。本作は美しい白い輝きを持つシロチョウガイとオウムガイの貝を用いた灰皿で、貝の自然な形を生かした器となっている。表面を磨き上げ、金属の縁飾りを付け、珊瑚や真珠、小粒のダイヤやガラスなどを用いて花や、木の葉を表した装飾が取り付けられており、愛らしく華やかな品に仕上げられている。

大きい方の灰皿の裏面に、大統領フェルディナンド・E・マルコス（在職1965−86）より贈られたことを示すプレートが取り付けられている。同大統領は、昭和41年9月に国賓として来日しており、この作品が贈られた昭和52年4月の来日は、国賓として2回目の来日であった。

上巻 巻首

下巻 部分

下巻 巻末

18
梁黄胄
百驢図　2巻
1978年／紙本墨画
本紙（上巻）33.8×656.2
（下巻）33.8×612.4

昭和53年(1978)、公賓として来日の中華人民共和国国務院副総理夫妻より

Liang Huang zhou
One hundred donkeys
1978／ink on paper

gift from Vice Premier of People's Republic of China and his wife, when visiting Japan as Official Guests in 1978

1949年に中華人民共和国が成立して、そしてわが国の戦後においても、初めて新中国から公賓としてお迎えした国務院副総理・鄧小平(在職1977−80)より贈られた画巻である。鄧副総理の来日は、1972年9月29日に、北京において両国が共同声明を発して以来、両国間の平和友好関係をさらに強固にして発展させるため、日中平和条約批准書を取り交わすことが大きな目的であった。10月23日、首相官邸で批准書の交換式が行われて後、鄧副総理は皇居を訪問、昭和天皇と会見をしている。

題名の“百”はもろもろ、あらゆる、数多くの意であり、本図には百匹近くの驢馬が、様々な墨色、筆遣いによる筆線をいかして、躍動感豊かに描き分けられている。黄胄の描く驢馬は絶品として讃えられたことが、本図からも十分に看取される。

梁黄胄(1925〜97)は、河北省の出身。著名な山水画家・趙望雲や司徒喬に師事し、中国国内を旅しながら写生を重ねる。特に、新疆、青海、甘粛、チベットの少数民族地区に入り、その生活の様子を写生したことで知られる。早くからその画才が評価され、創作活動と共に、指導的役割も果たした。

19
クースタ
花卉文ガラス鉢　1点
1979年／ガラス／D.23.7、H.29.5
昭和55年（1980）、国賓として来日のスウェーデン王国国王カール十六世グスタフ王妃シルヴィア両陛下より

KOSTA
Glass bowl with flower design
1979／glass
gift from H.M. the King Carl XVI Gustaf and H.M. the Queen Silvia, of Kingdom of Sweden, when visiting Japan as State Guests in 1980

スウェーデンにおける本格的なガラス生産は、16世紀に始まったと伝えられる。スウェーデン南部のスモーランド地方は19世紀の産業革命以降、ガラス生産が盛んになり、数多くのガラス工場が集中する土地である。そのなかでも、1742年に創立されたクースタは、長い歴史を持つ同国を代表するガラス工場である。この脚付きのガラス鉢は、菊や百合、薊、蘭などの多種類の花々の図様が、精緻なエングレーヴィング技法で表されている。デザインは高台部分に刻まれた銘文から、1969年から1991年にかけてクースタで活動していたリーサ・バウエルであることがわかる。スウェーデン王国国王カール十六世グスタフ(在位1973－　)王妃シルヴィア両陛下より昭和天皇、香淳皇后へ贈られた。前述した銘文には、その他に御贈進された日付「14.4 1980」も刻まれている。

20
フェルナンド・ソベル
流れ 16 (EL RIO XVI)
1978年／キャンバス・油彩
本紙99.5×149.6

昭和55年(1980)、国賓として来日のスペイン国国王フアン・カルロス一世王妃ソフィア両陛下より

Fernand Zobel
The River 16
1978／oil on canvas

gift from H.M. the King Juan Carlos I and H.M. the Queen Sofía of Kingdom of Spain, when visiting Japan as State Guests in 1980

作者のフェルナンド・ソベル(1924～84)は、抽象画家として名声を高めた人物である。1924年にフィリピンのマニラに生まれ、1940年代にはアメリカで作画活動をし、50年代にはマニラに帰り大学で美術を教える一方で制作に打ち込んだ。60年代に入るとスペインへ活動の場を移し、クエンカにスペイン抽象美術館を設立したことでも知られる。

ソベルが一貫して描き続けたのは、空間と線の調和をテーマにした抽象画である。なかでも「流れ 16」と題された本図は、スペインに移った作者が1975年から78年にかけて取りかかった、色彩を可能な限り取り除いた連作ホワイトシリーズ(Serie Blanca)の一点である。ソベルはマニラ在住時には中国および日本美術に強い関心を抱き、とりわけ中国の書について熱心に学習したというが、本図の空間を切り裂く大胆な筆線にはそうした学習の成果も見て取れる。

昭和55年(1980)、国賓として来日されたスペイン国国王フアン・カルロス一世(在位1975－)王妃ソフィア両陛下より昭和天皇へ贈られた作品。またこの時、皇太子(天皇陛下)には、やはりスペインを代表する画家ホアン・ミロの絵が贈られている。

22
フラミンゴ置物　2点

20世紀後半／水晶、銀
大：D.8.5×W.37.0×H.30.5
小：D.10.5×W.32.0×H.28.0

昭和59年（1984）、国賓として来日のブラジル連邦共和国大統領夫妻より

Pair of flamingos

late 20th c.／crystal, silver

gift from President of Federative Republic of Brazil and his wife, when visiting Japan as State Guests in 1984

薄いピンクに色づいた水晶の結晶をフラミンゴの羽に見立てて、銀で作った鳥の体に結晶の塊を取り付けた置物。昭和59年5月、国賓として来日されたブラジル連邦共和国大統領ジョアン・バチスタ・デ・オリヴェイラ・フィゲレード（在職1979−85）夫妻より香淳皇后へ贈られた品である。ブラジルは鉱物資源が豊かな国土をもち、豊富な埋蔵量を誇る鉄鉱石のほか、ダイヤモンドやオパールなどの宝石の主要生産地としても知られており、水晶の採掘も盛んに行われて輸出されている。

なお、ブラジルは海外では日系の人々が最も多く住む国であり、その数はおよそ150万人という。昭和33年に三笠宮同妃両殿下がブラジル移民50年記念式典に参列されたのをはじめ、42年には天皇皇后両陛下が昭和天皇のご名代として国際親善のために同国をご訪問されて以降、皇族方が訪問を重ねられて同国との友好関係を築かれている。

21
三彩駱駝　1点

20世紀後半
陶磁
D.31.0 × W.72.0 × H.85.5

昭和57年（1982）、公賓として来日の中華人民共和国国務院総理より

Camel, three color glaze

late 20th c.
ceramic

gift from Premier of People's Republic of China, when visiting Japan as Official Guest in 1982

三彩は中国で発達したやきもので、唐時代に全盛を迎えたことから、唐三彩と呼んで親しまれている。白い陶胎の素地に緑色、褐色、藍色の釉薬をほどこして、さらに透明釉をかけて焼成し、それまでのやきものにはなかった華やかな色彩が見どころとなっている。また、造形的にもすぐれ、動物や人をかたどったやきものは、明器と呼ばれ、古代中国で神殿や貴族の墓に供えるために作られたものであった。墓の中に生前と同じ生活環境を整えるために作られたので、人物、家畜、器物など題材は多様である。馬とともに唐三彩明器のすぐれた造形感覚を伝えるのが駱駝である。馬同様に駱駝も豪華に飾り付けられることが多く、本作も鬼面をかたどった鞍や革袋、水瓶など、西方の砂漠地帯のイメージが投影されている。本作は中国河南省を中心に出土する唐三彩の模造で、大英博物館所蔵の三彩駱駝に形姿、寸法が近似している。中華人民共和国国務院総理であった趙紫陽（在職1980−87）より昭和天皇へ贈られた品である。

23
崔維鉉
十長生図刺繍屏風　2曲1隻
20世紀後半
絹・刺繍
総226.0×164.0

昭和59年（1984）、国賓として来日の大韓民国大統領夫妻より

Choi You Hyun
Ten symbols of longevity in embroidery
late 20th c.
silk embroidery

gift from President of Republic of Korea and his wife, when visiting Japan as State Guests in 1984

画題の“十長生”とは、太陽、山、水、石、雲、松樹、不老草、亀、鶴、鹿の十種類の長寿を表すもの－長生物を指し、本作品はそれらが表された仙郷を刺繍で表した屏風である。こうした図様は、中国や韓国、そしてわが国でも、古くより新年の贈り物や上流階級の年頭の贈り物として、調度や絵画作品に表されて制作された。韓国の長生図は、色彩感鮮やかに、十種類が欠けることなく表されることが特徴で、古くから宮廷の画員たちが取り上げてきた伝統的な図様でもある。

本屏風は、昭和59年9月6日、大韓民国大統領全斗煥（在職1980－88）が、国賓として公式に来日された折に、昭和天皇に贈られた品である。昭和天皇が、宮中晩餐のおことばで「（大韓民国）大統領閣下の御来訪は、貴国元首の初めての公式御来日として、両国の関係史上、画期的なことであり、両国の友好増進のため、誠に喜ばしいことであります。」と述べられ、この後の両国は急速に政治、経済、文化の各方面で交流が図られた。

韓国刺繍は、中国、日本と共に、その歴史も古く、最高級の装飾技術として発展していた。しかし、19世紀以降、社会体制の変化等の影響でその品質が落ちて衰退するが、20世紀後半に入って再び伝統刺繍が注目され、重要無形文化財に指定された名匠らを中心に、その保存活動が行われている。本屏風の制作者、崔維鉉（1936～　）も現在も活躍するその第一人者である。

24
ノクシ・カンタ壁掛　1対

20世紀後半
絹・刺繍
本紙各78.0×95.5

昭和60年（1985）、国賓として来日のバングラデシュ人民共和国大統領夫妻より

Nakshi kantha wall hanging

late 20th c.
silk embroidery

gift from President of People's Republic of Bangladesh and his wife, when visiting Japan as State Guests in 1985

本作品は、ノクシ・カンタと呼ばれる刺繍による作品で、ノクシ・カンタという語を広める契機となったバングラデシュの詩人、ジョシムッディン（1903～76）の詩集『ノクシ・カンタの野原』（1929年）に描かれた男女の悲恋物語を表している。これは、ルパとシャジュの二人が出会って恋に落ち、愛の告白をし、結婚の日を迎えるが、ルパが争いに巻き込まれ投獄され、二人は引き裂かれてしまうという物語である。シャジュは二人の幸せな日々を思い起こし、それをカンタに刺繍しながら帰りを待つが、彼が戻る前に亡くなってしまう。シャジュの墓には、彼女が精魂込めて縫い上げたカンタが掛けられたが、戻ったルパは、これを見てシャジュの墓であると知り、寄り添うようにして亡くなった。二面の額には、この悲しい物語が、ベンガルの農村の暮らしとともに、美しく緻密な刺繍で装飾的に表現されている。

バングラデシュとインドの西ベンガル州を含むベンガル地方では、古くからカンタと呼ばれる文様等を刺繍した刺し子の布が女性達によって作られていた。これは、ヒンドゥー教やイスラム教などの宗教や民間信仰、神話や民話をもとに、

作り手が自身、あるいは家族などの身近な人のための儀礼や日用の品として制作したものである。単純な文様をはじめ、当時の女性達が目にした生活用品や動物、宗教的な図様までが美しく刺繍されたカンタは、女性達が集まる語らいの時間の中で作り上げられ、母から娘へとその技術は受け継がれてきた。しかし、1947年のインド・パキスタン分離独立から1971年のバングラデシュ独立に至る混乱と戦争の間に、カンタは衰退してしまう。この状況を危惧した芸術家や学者たちの間で民俗芸術復興運動が興り、NGOなどの働きかけもあって、技術訓練を受けた女性達が賃金労働として製作するようになったのが、商品化されたカンタである。これらは単純な意匠のものよりも、物語性のある意匠が好まれ、文様という意味の“ノクシ”をつけて、ノクシ・カンタと呼ばれている。ノクシ・カンタは、バングラデシュの近代化を象徴する、国を代表する民俗芸術と言えよう。本作品は、昭和60年6月に国賓として来日したバングラデシュ人民共和国フセイン・モハメド・エルシャド大統領(在職1983−90)夫妻より昭和天皇へ贈られた。

25
騎馬戦士像

20世紀後半／銀・鍛造
D.13.3 × W.25.0 × H.35.5

昭和61年（1986）、国賓として来日のニジェール共和国最高軍事評議会議長より

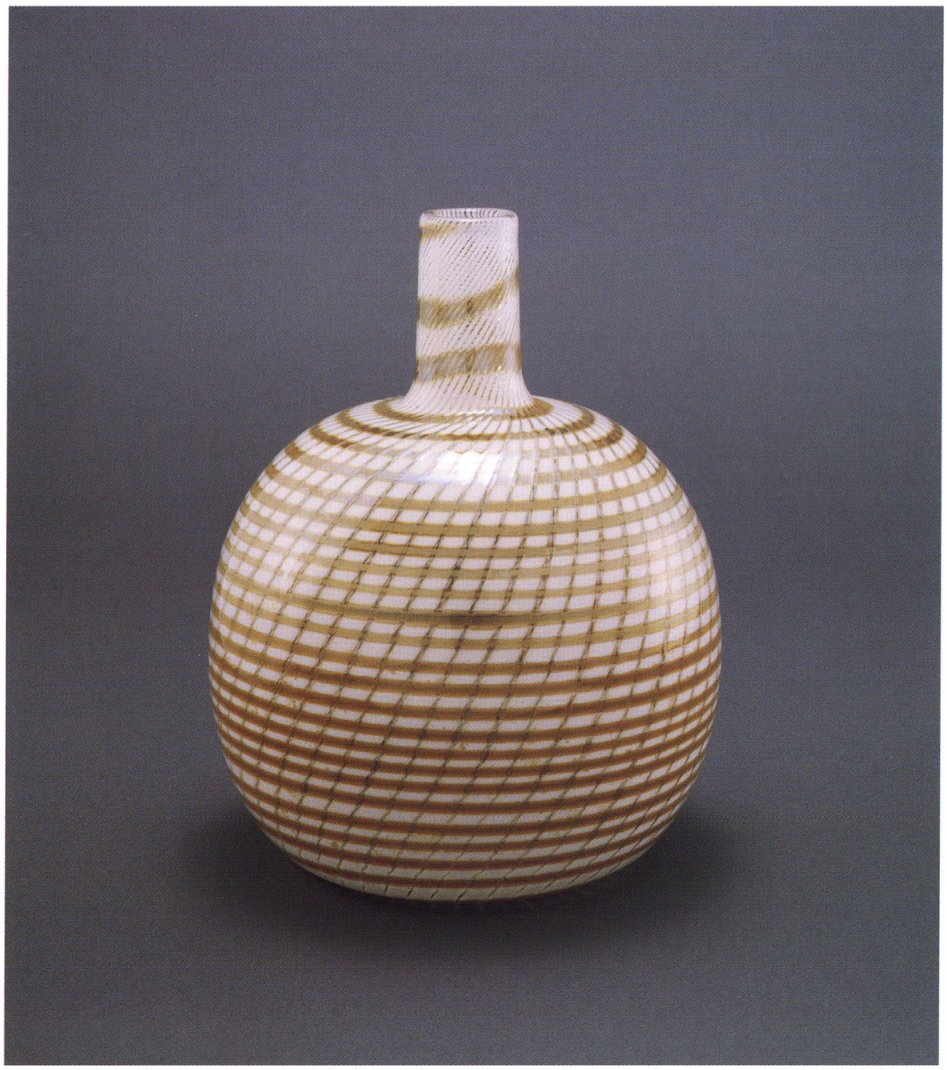
Cavalry warrior

late 20th c.／hammered silver

gift from Chairmen of the Supreme Military Council Republic of Niger, when visiting Japan as State Guest in 1986

王冠のような被り物をし、美しい馬具に飾られた馬に乗り、右手に剣を構えた高貴なトゥアレグ戦士の像である。トゥアレグの人々は、現在もニジェールをはじめ、アルジェリア、マリ、リビアにまたがって居住しており、かつてはラクダを用いたサハラ越えの長距離交易に従事し、勇猛な戦闘集団を築いていた。

本作品は、昭和61年9月、国賓として来日したニジェール共和国最高軍事評議会セイニ・クンチェ議長（在職1974−87）より昭和天皇へ贈られた品である。この時、本作品とともに「ニジェール国地方各市町村の銀製紋章」が贈られているが、この銀製紋章も、様々な形のクロスに繊細な線刻文様が施された銀製品である。トゥアレグの人々は精巧な銀細工の装身具を生み出すことで知られているが、本作品のような具象的な作例は稀少である。騎士や馬の胴部、剣や鞘といった小物にまで細かな幾何学文様の線刻が施され、トゥアレグの銀細工技術の高さを示している。



26
ヌータヤルヴィ
縞文ガラス花瓶　1点
1980年代／ガラス／D.18.0、H.23.5
昭和61年（1986）、国賓として来日のフィンランド共和国大統領夫妻より

Nuutajärvi
Glass vase with stripes
1980's／glass
gift from President of Republic of Finland and his wife, when visiting Japan as State Guests in 1986

ヌータヤルヴィは、1793年に設立されたフィンランド最古のガラス工場である。当初は窓ガラスやガラス瓶など、日常用のガラス制作を行っていたが、1851年より吹きガラスの技法を用いた芸術性の高い作品を制作するようになった。1950年代初期にはフィンランドを代表する製陶会社であるアラビア窯と同じグループの傘下に入り、カイ・フランクなどアラビア窯を代表するデザイナーと共同制作が行われた。本作は、1960年代からヌータヤルヴィでガラス作家として活躍したオイヴァ・トイッカによるもので、無色透明のガラスに白色のガラスを斜線状に熔着させて宙吹きで成形し、さらにその上から黄色の色ガラスを水平に溶かし着けて文様としている。一見するとシンプルな作風であるが、高い技術力に裏打ちされた、芸術性と機能性を兼ね備えた北欧らしいガラス工芸作品である。フィンランド共和国大統領マウノ・ヘンリック・コイヴィスト（在職1982–94）夫妻より香淳皇后へ贈られた。

27
猿型容器

1986年
銀・鍛造
D.16.2 × W.14.5 × H.13.7

昭和61年（1986）、国賓として来日のメキシコ合衆国大統領夫妻より

Vessel in monkey shape

1986
hammered silver

gift from President of United Mexican States and his wife, when visiting Japan as State Guests in 1986

尻尾を頭上に掲げた猿の姿を表した銀製の容器で、メキシコ国立人類学博物館所蔵の15～16世紀にアステカで制作された黒曜石製の猿型容器をほぼ同寸で模造している。猿とアステカの風の神エヘカトルには関連があるとされており、黒曜石製の猿型容器は、エヘカトルにまつわる儀式で用いられたと考えられている神聖な祭具である。その神聖さを示すかのように、黒曜石製の猿型容器は、器面が磨かれ鏡のような光沢を放っているが、本作品もまた銀製ながら白くまばゆい輝きを放っている。

本作品は、メキシコ合衆国ミゲル・デラマドリ・ウルタード大統領（在職1982−88）が昭和61年12月に国賓として来日した際に、昭和天皇に贈られた品である。背面にメキシコ合衆国の国章とウルタード大統領のサインが表されている。ウルタード大統領を囲んでの晩餐が、国賓をお招きして行われた宮中晩餐への昭和天皇の最後のご出席となった。

28
エンゲルベルト・ビトムスキ
冬の風景　1点
1986年／キャンバス・油彩
本紙53.4×68.5

昭和62年（1987）、国賓として来日のポーランド共和国国家評議会議長夫妻より

Engelbert Bytomski
Winter scene
1986／oil on canvas

gift from Prime Minister of Republic of Poland and his wife, visiting Japan as State Guests in 1987

作者のエンゲルベルト・ビトムスキ（1900～？）はポーランドで活躍した画家で、90歳近くまで存命であったらしい。残された作品からは風景画を得意とした画家であることが分かり、観る者の心を落ち着かせるやや深く沈んだ色遣いがその特徴と考えられる。本図は、擦れた筆で表された冬枯れの木々をぬうように流れる小川が悠々とした本流へとつながっていく、ポーランドの冬景色を描く。白とグレーを基調とした画面からは、この国の厳しい寒さとともに透き通った空気や冷たく澄んだ水の清らかさが感じられる。画面左下には、作者の愛称「Bert」のサインと「'86」という制作年が記されており、晩年の作であることが分かる。

昭和62年6月、国賓として来日されたポーランド共和国国家評議会議長ヴォイチェフ・ヤルゼルスキ（在職1985－89）夫妻より昭和天皇へ贈られた作品。

29
コルネリス・ジットマン
ディナ・ボウル (Dina-Boule)
1975年
ブロンズ
D.14.0 × W.15.0 × H.15.0

昭和63年 (1988)、国賓として来日のベネズエラ共和国 (現ベネズエラ・ボリバル共和国) 大統領より

Cornelis Zitman
Dina-Boule
1975
bronze

gift from President of Republic of Venezuela (present Bolivarian Republic of Venezuela) and his wife, when visiting Japan as State Guests in 1988

手を組み足を抱え、その中に頭をうずめる女性像である。丸み、軟らかさといった女性の体形の特徴が、単純化した球体へと置き換えられることで、量感が生まれ、独特な存在感を放つ。

コルネリス・ジットマン(1926～　)は、1947年に祖国オランダからベネズエラに移住、以後ベネズエラのカラカスに永住し創作活動を続けている。本作品のモデルは、ジットマンのパトロンであったディナ・ヴィエルニ(1919～2009)という女性である。ディナは彫刻家マイヨールのモデルを務めた女性で、ピカソやボナールなど当時の芸術家と交流を持った。ジットマンも彼女の手で世界に紹介され、ベネズエラを代表する彫刻家として活躍している。

本作品は、昭和63年4月、国交樹立50周年につき国賓として来日したベネズエラ共和国ハイメ・ルシンチ大統領(在職1984−89)から昭和天皇へ贈られた品である。この時、昭和天皇はルシンチ大統領をむかえて御会見に臨まれたが、手術を終えられ初めての国賓とのご会見であった。当時侍従をつとめた卜部亮吾は、その日記に伝聞として「大統領は「手術を受けられたと聞いたが、お目にかかれて幸運だ」と語り、感激の涙を浮かべたという」と記している。

30
バダラ・カマラ（原画）、
セネガル装飾美術工房

シーヌの夜 (Nuit du Sine)

1988年
ウール・綴織
246×320

昭和63年（1988）、国賓として来日のセネガル共和国大統領より

Manufactures Sénégalaises des Arts Décoratifs/original design by Badara Camara

Night of Sine

1988
wool, tapestry

gift from President of Republic of Senegal and his wife, when visiting Japan as State Guests in 1988

詩人でありセネガル共和国初代大統領を務めた、レオポール・セダル・サンゴール（1906～2001、在職1960−80）の詩「シーヌの夜」の内容を、綴織の壁掛として表現した作品である。サンゴールは、かつてシーヌ川流域に君臨した古い王家の血を引いており、本詩では、祖先の声を聞き、自らを根源に回帰させる、神秘的な故郷の夜を詠っている。本作品では、画面中央のランプを手にした女性の横顔の周囲に、地霊、精霊や祖先たちが取り巻く様子を、緑や黄、赤等の強く烈しい色彩で、躍動的に、そして半ば抽象的に表現している。

セネガル装飾美術工房は、同国の近現代美術の指導者の一人であるパパ・イブラ・タル（1935～　）の尽力によって設立されて後、文化と教育の基盤形成に力を入れたサンゴールによって、1966年に公的施設として規模が拡充され、現在まで活動を続けている。タルはフランスで建築学や美術教育学等を学び、セネガルに西洋美術の技法や手法をもたらした人物である。綴織の技術もまた欧州より導入され、同工房では、セネガルのデザイナーが、自国の美しい自然、民族や説話などに取材して描いた原画を元に、主に輸出用として、様々な作品を製作している。原画を描いたバダラ・カマラ（1947～？）は、国立美術学校を卒業後、タルに続くデザイナーとして活躍し、各国への贈進品を手がけた。本作品を昭和天皇に贈ったアブドゥ・ディウフ大統領（在職1981−2000）は、昭和期にお迎えした最後の国賓であった。

国賓・公賓一覧（昭和28年から63年まで）

＊この一覧の接遇内容は、当時のものである。

年号	月	接遇	国名（当時）	賓客
昭和28年（1953）	11月	国賓	アメリカ合衆国	リチャード・M・ニクソン副大統領夫妻
昭和29年（1954）	3月	国賓	カナダ	ルイ・S・サン・ローラン首相枢密院議長
	12月	国賓	セイロン	ジョン・コテラワラ首相
昭和30年（1955）	4月	国賓	タイ王国	プレーク・ピブンソンクラム元帥首相夫妻
	7月	国賓	ビルマ連邦社会主義共和国	ウ・ヌ首相夫妻
	12月	国賓	カンボジア王国	前国王（内閣総理大臣）シハヌーク殿下、王妹ラシミ・ソパン殿下
昭和31年（1956）	6月	国賓	ニュージーランド	シドニー・ジョージ・ホーランド首相夫妻
	10月	国賓	インド	S・ラダクリシュナン副大統領
	10月	国賓	ネパール王国	タンカ・プラサド・アチャリャ首相夫妻
	11月	国賓	エチオピア帝国	皇帝ハイレ・セラシエ一世陛下
昭和32年（1957）	4月	国賓	オーストラリア連邦	ロバート・ゴードン・メンジス首相夫妻
	4月	国賓	パキスタン回教共和国	フセイン・シャヒード・スラワルディ首相
	9月	国賓	ユーゴズラヴィア社会主義連邦共和国	スヴェトザル・ヴクマノヴィチ首相
	9月	国賓	中華民国	張羣総統特使総統府秘書長
	10月	国賓	インド	ジャワハルラール・ネルー首相
	11月	国賓	イラク王国	皇太子アブドウル・イラー殿下
昭和33年（1958）	1月	国賓	インドネシア共和国	スカルノ大統領
	3月	国賓	ラオス王国	王族（内閣総理大臣）スーヴァナ・プーマ同妃両殿下
	4月	国賓	トルコ共和国	アドナン・メンデレス首相
	5月	国賓	イラン帝国	皇帝モハマッド・レザー・シャー・パハラヴィー陛下
	5月	国賓	マラヤ	トゥンク・アブドゥル・ラーマン・プトゥラ首相夫妻
	9月	国賓	インド	ラジェンドラ・プラサド大統領
	12月	国賓	フィリピン共和国	カルロス・P・ガルシア大統領夫妻
昭和34年（1959）	1月	国賓	オーストリア共和国	ユリウス・ラープ首相
	2月	国賓	ニュージーランド	ウォルター・ナッシュ首相
	6月	国賓	インドネシア共和国	スカルノ大統領
	11月	国賓	エチオピア帝国	皇太子アスファ・ウォセン同妃両殿下
昭和35年（1960）	3月	国賓	ドイツ連邦共和国	コンラッド・アデナウァー首相
	4月	国賓	ネパール王国	国王マヘンドラ王妃ラトナ両陛下
	12月	国賓	パキスタン回教共和国	モハマッド・アユーブ・カーン大統領
昭和36年（1961）	5月	国賓	ペルー共和国	マヌエル・プラード大統領夫妻
	10月	国賓	カナダ	ジョン・G・ディーフェンベイカー首相夫妻
	11月	国賓	連合王国（英国）	王女アレキサンドラ殿下
	12月	国賓	アルゼンチン共和国	アルトゥロ・フロンディシ大統領夫妻
昭和37年（1962）	10月	国賓	メキシコ合衆国	アドルフォ・ロペス・マテオス大統領夫妻
昭和38年（1963）	4月	国賓	オランダ王国	王女ベアトリックス殿下
	5月	国賓	タイ王国	国王プーミポン王妃シリキット両陛下
	11月	国賓	ドイツ連邦共和国	ハインリッヒ・リュプケ大統領夫妻
昭和39年（1964）	1月	国賓	ベルギー王国	国王ボードワン王妃ファビオラ両陛下
	4月	国賓	フランス共和国	ジョルジュ・ポンピドゥ首相夫妻
	6月	国賓	マレーシア	国王サイド・プートラ王妃バドリア両陛下
＊昭和39年6月の閣議決定により「公賓」の制度が設けられる。				
昭和40年（1965）	4月	公賓	ラオス王国	皇太子ヴォン・サヴァン同妃両殿下
	7月	公賓	ニュージーランド	ケース・ホリオーク首相夫妻
	11月	国賓	マダガスカル共和国	フィリベール・チラナナ大統領夫妻
昭和41年（1966）	5月	公賓	フィリピン共和国	フェルナンド・ロペス副大統領兼農業天然資源大臣夫妻
	9月	国賓	ビルマ連邦社会主義共和国	ネ・ウィン革命委員会議長夫妻
	9月	国賓	フィリピン共和国	フェルディナンド・E・マルコス大統領夫妻
昭和42年（1967）	1月	公賓	ブラジル連邦共和国	アルトゥール・ダ・コスタ・イ・シルヴァ次期大統領夫妻
	6月	公賓	セイロン	ダドレー・シェルトン・セナナヤケ首相
	11月	公賓	中華民国	蔣經国国防部長
昭和43年（1968）	3月	国賓	インドネシア共和国	スハルト大統領夫妻
	4月	国賓	ユーゴズラヴィア社会主義連邦共和国	ヨシプ・ブロズ・チトー大統領夫妻
	4月	公賓	オーストリア共和国	ヨゼフ・クラウス首相夫妻
	5月	公賓	タイ王国	タノム・キッティカチョン首相夫妻
	10月	国賓	シンガポール共和国	リー・クワン・ユー首相夫妻
＊昭和43年11月、新宮殿の竣工。				

昭和44年(1969)	4月	国賓	アフガニスタン王国	国王モハメッド・ザヒール・シャー王妃ホマイラ両陛下
	5月	公賓	ドイツ連邦共和国	クルト・ゲオルク・キージンガー首相夫妻
	6月	国賓	インド	インディラ・ガンジー首相
昭和46年(1971)	4月	国賓	コンゴー人民共和国	ジョゼフ・デジレ・モブツ大統領夫妻
	5月	国賓	サウジアラビア王国	国王ファイサル陛下
	10月	公賓	マレーシア	トゥン・ハジ・アブドル・ラザク首相夫妻
昭和47年(1972)	1月	公賓	スペイン	皇太子ファン・カルロス同妃両殿下
	3月	国賓	メキシコ合衆国	ルイス・エチュベリーア・アルヴァレス大統領夫妻
	4月	国賓	パラグアイ共和国	アルフレド・ストロエスネル大統領
	5月	国賓	アメリカ合衆国	スピロ・セオドー・アグニュー副大統領
	9月	公賓	連合王国（英国）	エドワード・ヒース首相
	11月	公賓	アフガニスタン王国	王女ビルキス殿下、同夫君サンダル・アブドル・ワリ殿下
昭和48年(1973)	2月	公賓	国際連合	クルト・ワルトハイム事務総長夫妻
	4月	公賓	イタリア共和国	ジュリオ・アンドレオッティ首相夫妻
	10月	公賓	バングラデシュ人民共和国	シェイク・ムジブル・ラーマン首相
	10月	公賓	オーストラリア連邦	エドワード・ゴッフ・ウィットラム首相夫妻
＊昭和49年4月、迎賓館赤坂離宮が開館。				
昭和49年(1974)	11月	国賓	アメリカ合衆国	ジェラルド・R・フォード大統領
昭和50年(1975)	4月	国賓	ルーマニア社会主義共和国	ニコラエ・チャウシェスク大統領夫妻
	5月	国賓	連合王国(英国)	女王エリザベス二世陛下、王配エディンバラ公フィリップ殿下
昭和51年(1976)	2月	公賓	モロッコ王国	アハメッド・オスマン首相、王女ララ・ヌズハ殿下夫妻
	3月	国賓	ヨルダン・ハシェミット王国	国王フセイン一世王妃アーリア両陛下
	4月	公賓	ニュージーランド	ロバート・D・マルドゥーン首相夫妻
	6月	公賓	オーストラリア連邦	J・M・フレーザー首相夫妻
	7月	公賓	フランス共和国	ジャック・シラク首相夫妻
	9月	国賓	ブラジル連邦共和国	エルネスト・ガイゼル大統領夫妻
	10月	公賓	カナダ	ピエール・E・トルドー首相夫妻
	11月	公賓	スリランカ民主社会主義共和国	バンダラナイケ首相
昭和52年(1977)	1月	公賓	イラク共和国	タハ・ムヒディン・マルーフ副大統領
	4月	国賓	フィリピン共和国	フェルディナンド・E・マルコス大統領夫妻
	9月	公賓	タイ王国	ターニン・クライウィチェン首相夫妻
	9月	公賓	マレーシア	フセイン・オン首相夫妻
	12月	公賓	パプア・ニューギニア	マイケル・ソマレ首相夫妻
昭和53年(1978)	3月	国賓	ブルガリア人民共和国	トドル・ジフコフ国家評議会議長
	4月	国賓	バングラデシュ人民共和国	ゼアウル・ラーマン大統領夫妻
	4月	国賓	ドイツ連邦共和国	ヴァルター・シュール大統領夫妻
	5月	国賓	ネパール王国	国王ビレンドラ王妃アイシュワリア両陛下
	9月	公賓	ベルギー王国	レオ・ティンデマンス首相夫妻
	10月	公賓	ドイツ連邦共和国	ヘルムート・シュミット首相夫妻
	10月	公賓	中華人民共和国	鄧小平国務院副総理夫妻
	10月	国賓	メキシコ合衆国	ロペス・ポルティーリョ大統領夫妻
	11月	公賓	ポーランド人民共和国	ピオトル・ヤロシェヴィッチ首相夫妻
昭和54年(1979)	1月	公賓	タイ王国	クリアンサック・チャマナン首相夫妻
	4月	国賓	セネガル共和国	レオポール・セダル・サンゴール大統領夫妻
	6月	国賓	アメリカ合衆国	ジミー・カーター大統領夫妻
	9月	国賓	スリランカ民主社会主義共和国	ジューニアス・リチャード・ジャヤワルダナ大統領夫妻
	10月	国賓	アルゼンチン共和国	ホルヘ・ラファエル・ヴィデラ大統領夫妻
	10月	公賓	シンガポール共和国	リー・クァン・ユー首相夫妻
	11月	公賓	チェコスロバキア社会主義共和国	ルボミール・シュトロウガル首相
昭和55年(1980)	3月	国賓	パナマ共和国	アリスティデス・ロヨ・サンチェス大統領夫妻
	4月	国賓	スウェーデン王国	国王カール十六世グスタフ王妃シルヴィア両陛下
	4月	公賓	オランダ王国	アンドリース・ファン・アフト首相夫妻
	5月	公賓	フィジー	カミセセ・マラ首相夫妻
	5月	国賓	中華人民共和国	華国鋒国務院総理
	9月	国賓	ザンビア共和国	ケネス・デェイヴィッド・カウンダ大統領夫妻
	10月	国賓	スペイン	国王フアン・カルロス一世王妃ソフィア両陛下
昭和56年(1981)	3月	国賓	タンザニア連合共和国	ジュリアス・カンバラゲ・ニエレレ大統領夫妻
	4月	国賓	デンマーク王国	女王マルグレーテ二世陛下、王配ヘンリック殿下

	5月	国賓	ドイツ民主共和国	エーリヒ・ホネカー国家評議会議長
	11月	公賓	タイ王国	プレム・ティンスラノン首相
昭和57年(1982)	3月	国賓	イタリア共和国	サンドロ・ペルティーニ大統領
	4月	国賓	ケニア共和国	ダニエル・トロイティッチ・アラプ・モイ大統領
	4月	国賓	フランス共和国	フランソワ・ミッテラン大統領夫妻
	4月	公賓	アメリカ合衆国	ジョージ・ブッシュ副大統領夫妻
	6月	公賓	中華人民共和国	趙紫陽国務院総理
	8月	公賓	国際連合	ハビエル・ペレス・デ・クエヤル事務総長夫妻
	9月	公賓	連合王国（英国）	マーガレット・サッチャー首相夫妻
昭和58年(1983)	1月	公賓	マレーシア	マハディール・モハマド首相夫妻
	4月	国賓	エジプト・アラブ共和国	モハメッド・ホスニィ・ムバラク大統領夫妻
	7月	国賓	パキスタン回教共和国	モハマッド・ジアウル・ハック大統領夫妻
	9月	国賓	アイルランド	パトリック・J・ヒラリー大統領夫妻
	10月	国賓	ノルウェー王国	国王オラフ五世陛下
	11月	公賓	ドイツ連邦共和国	ヘムルート・コール首相夫妻
	11月	国賓	アメリカ合衆国	ロナルド・レーガン大統領夫妻
	11月	公賓	中華人民共和国	胡耀邦中国共産党中央委員会総書記
＊昭和59年3月の閣議決定により「公式実務訪問賓客」の制度が設けられる。				
昭和59年(1984)	2月	公賓	オーストラリア連邦	ロバート・ジェームズ・リー・ホーク首相夫妻
	4月	国賓	ブルネイ・ダルサラーム国	国王ハサナル・ボルキア王妃サレハ両陛下
	4月	公賓	ベルギー王国	ウィルフリード・マルテンス首相夫妻
	4月	国賓	カタール国	首長シェイク・ハーリファ殿下
	5月	公賓	欧州共同体（EC）	ガストン・エグモン・トルン委員長夫妻
	5月	国賓	ブラジル連邦共和国	ジョアン・バチスタ・デ・オリヴェイラ・フィゲレード大統領夫妻
	6月	公賓	ポルトガル共和国	マリオ・アルベルト・ノブレ・ソアレス首相夫妻
	7月	国賓	ビルマ連邦社会主義共和国	サン・ユ大統領夫妻
	9月	国賓	大韓民国	全斗煥大統領夫妻
	9月	国賓	ガボン共和国	エル・アジ・オマール・ボンゴ大統領夫妻
	10月	公賓	チュニジア共和国	モハメッド・ムザリ首相夫妻
昭和60年(1985)	4月	公賓	オランダ王国	ルドルフス・ルッベルス首相夫妻
	5月	公賓	トルコ共和国	トゥルグット・オザール首相夫妻
	6月	国賓	バングラデシュ人民共和国	フセイン・モハメッド・エルシャド大統領夫妻
	7月	公賓	イラン回教共和国	ホジャトル・エスラム・アクバル・ハシェミ・ラフサンジャニ・イスラム議会議長
	7月	公賓	パプア・ニューギニア	マイケル・T・ソマレ首相
	9月	公賓	スペイン	フェリペ・ゴンザレス・マルケス首相夫妻
	9月	公賓	ハンガリー人民共和国	ジョルジュ・ラーザール閣僚評議会議長
	11月	公賓	インド	ラジーブ・ガンジー首相夫妻
昭和61年(1986)	1月	公賓	欧州共同体（EC）	ジャック・ドロール委員長夫妻
	5月	公賓	イタリア共和国	ベッティーノ・クラクシ首相夫妻
	5月	公賓	カナダ	ブライアン・マルルーニー首相夫妻
	5月	公賓	連合王国（英国）	皇太子チャールズ同妃両殿下
	7月	国賓	アルゼンチン共和国	ラウル・リカルド・アルフォンシン大統領
	9月	公賓	ビルマ連邦社会主義共和国	マウン・マウン・カ首相
	9月	国賓	ニジェール共和国	セイニ・クンチェ最高軍事評議会議長
	10月	国賓	フィンランド共和国	マウノ・ヘンリック・コイヴィスト大統領夫妻
	10月	公賓	シンガポール共和国	リー・クァン・ユー首相夫妻
	11月	国賓	フィリピン共和国	コラソン・コファンコ・アキノ大統領
	12月	国賓	メキシコ合衆国	ミゲル・デラマドリ・ウルタード大統領夫妻
昭和62年(1987)	3月	公賓	モロッコ王国	皇太子シディ・モハメッド殿下
	6月	国賓	ポーランド人民共和国	ヴォイチェフ・ヤルゼルスキ国家評議会議長夫妻
	7月	公賓	パキスタン回教共和国	モハマッド・カーン・ジュネジョ首相
	9月	公賓	タイ王国	皇太子ワチラロンコーン殿下
昭和63年(1988)	4月	国賓	ベネズエラ共和国	ハイメ・ルシンチ大統領
	4月	公賓	ヨルダン・ハシェミット王国	皇太子ハッサン・ビン・タラール同妃両殿下
	5月	公賓	ユーゴズラヴィア社会主義連邦共和国	ブランコ・ミクリッチ連邦執行評議会議長夫妻
	6月	国賓	セネガル共和国	アブドゥ・ディウフ大統領夫妻

※この一覧は、皇室のご接遇を受けられた国賓、公賓をまとめたものである。

出品目録

会期：平成23年1月22日（土）～3月13日（日）

番号	作品名	作者・制作地	員数	制作年代	技法・材質 サイズ D.（縦/奥行き/径）× W.（横/幅）× H.（高） 単位はcm	伝来
1	銀製盆		1点	1954年	銀・鍛造 D.51.0 H.2.2	昭和29年（1954）、国賓として来日のセイロン国（現スリランカ民主社会主義共和国）首相より
2	銀製蝋燭立		1対	1954年	銀・鋳造 D.10.5 × W.10.5 × H.34.5	昭和29年（1954）、国賓として来日のセイロン国（現スリランカ民主社会主義共和国）首相より
3	金銀製果物盛鉢		1点	20世紀半ば頃	金、銀 D.40.0 × W.37.0 × H.24.5	昭和31年（1956）、国賓として来日のエチオピア帝国皇帝ハイレ・セラシエ一世より
4	象牙製チェスの駒		1式	20世紀半ば頃	象牙 D.5.3 × W.5.3 × H.11.5 ～ D.1.8 × W.3.6 × H.6.2	昭和32年（1957）、国賓として来日のインド国首相より
5	金装短刀		1振	20世紀前半	金、銀、象牙、貴石 L.69.3	昭和33年（1958）、来日のインドネシア共和国大統領より
6	孔雀置物		1対	19世紀後半	貴石、珊瑚・彫金 D.19.5 × W.35.0 × H.49.5	昭和35年（1960）、国賓として来日のネパール王国国王マヘンドラ、王妃ラトナより
7	色絵金彩東屋に人物置物	ニンフェンブルク窯	1点	1960年	陶磁 D.21.0 × W.26.5 × H.36.8	昭和38年（1963）、国賓として来日のドイツ連邦共和国大統領夫妻より
8	色絵花卉文食器セット	トゥルネー窯	28点のうち	1760年頃	陶磁 丸型：D.23.5 H.3.5、D.24.5 H.2.5 角型：D.20.0 × W.20.0 × H.3.0	昭和39年（1964）、国賓として来日のベルギー王国国王ボードワン、王妃ファビオラより
9	カット・ガラス食器セット		26点のうち	20世紀後半	ガラス 大鉢：D.25.5 H.11.3 小鉢：D.11.5 H.7.3 皿：D.16.7 H.3.1	昭和43年（1968）、国賓として来日のユーゴスラビア社会主義連邦共和国大統領夫妻より
10	金装刀		1振	20世紀後半	金、ダイヤモンドほか L.98.0	昭和46年（1971）国賓として来日のサウジアラビア王国国王ファイサルより
11	獅子置物		1点	20世紀後半	ラピスラズリ D.5.0 × W.10.0 × H.6.5	昭和47年（1972）、公賓として来日のアフガニスタン王国王女ビルキス殿下、同夫君サンダル・アブドル・ワリ殿下より
12	真鍮製飾花瓶		1点	20世紀後半	真鍮・鋳造 D.20.0 × W.32.5 × H57.5	昭和48年（1973）、来日のカメルーン共和国大統領夫妻より
13	三角柱ガラス置物	スチューベン・グラス	1点	1974年	ガラス D.10.0 × W.11.5 × H.35.0	昭和49年（1974）、国賓として来日のアメリカ合衆国大統領より
14	天目釉抜絵巡礼者文皿	バーナード・リーチ	1点	1970年頃	陶磁 D.31.8、H6.5	昭和50年（1975）、国賓として来日の英国女王エリザベス二世陛下、王配エディンバラ公フィリップ殿下より
15	手賀沼 我孫子	バーナード・リーチ	1点	1918年	紙・エッチング 本紙23.6 × 16.4	昭和50年（1975）、国賓として来日の英国女王エリザベス二世陛下、王配エディンバラ公フィリップ殿下より
16	白い道（La Route Blanche）	ルネ・ジェニ	1点	1970年代前半	キャンバス・油彩 本紙59.3 × 36.5	昭和51年（1976）、公賓として来日のフランス共和国首相夫妻より
17	貝の灰皿		2点	20世紀後半	シロチョウガイ、オウムガイ、真珠、珊瑚ほか 大：D.19.0 × W.18.8 × H.5.5 小：D.13.5 × W.8.0 × H.5.5	昭和52年（1977）、国賓として来日のフィリピン共和国大統領夫妻より
18	百驢図	梁黄胄	2巻	1978年	紙本墨画 上巻：本紙33.8 × 656.2 下巻：本紙33.8 × 612.4	昭和53年（1978）、公賓として来日の中華人民共和国国務院副総理夫妻より
19	花卉文ガラス鉢	クースタ	1点	1979年	ガラス D.23.7、H.29.5	昭和55年（1980）、国賓として来日のスウェーデン王国国王カール十六世グスタフ王妃シルヴィア両陛下より
20	流れ 16（EL RIO XVI）	フェルナンド・ソベル	1点	1978年	キャンバス・油彩 本紙99.5 × 149.6	昭和55年（1980）、国賓として来日のスペイン国国王フアン・カルロス一世王妃ソフィア両陛下より
21	三彩駱駝		1点	20世紀後半	陶磁 D.31.0 × W.72.0 × H.85.5	昭和57年（1982）、公賓として来日の中華人民共和国国務院総理より
22	フラミンゴ置物		2点	20世紀後半	水晶、銀 大：D.8.5 × W.37.0 × H.30.5 小：D.10.5 × W.32.0 × H.28.0	昭和59年（1984）、国賓として来日のブラジル連邦共和国大統領夫妻より
23	十長生図刺繍屏風	崔維鉉	2曲1隻	20世紀後半	絹・刺繍 総226.0 × 164.0	昭和59年（1984）、国賓として来日の大韓民国大統領夫妻より
24	ノクシ・カンタ壁掛		1対	20世紀後半	絹・刺繍 本紙各：78.0 × 95.5	昭和60年（1985）、国賓として来日のバングラデシュ人民共和国大統領夫妻より
25	騎馬戦士像		1点	20世紀後半	銀・鍛造 D.13.3 × W.25.0 × H.35.5	昭和61年（1986）、国賓として来日のニジェール共和国最高軍事評議会議長より
26	縞文ガラス花瓶	ヌータヤルヴィ	1点	1980年代	ガラス D.18.0、H23.5	昭和61年（1986）、国賓として来日のフィンランド共和国大統領夫妻より
27	猿型容器		1点	1986年	銀・鍛造 D.16.2 × W14.5 × H.13.7	昭和61年（1986）、国賓として来日のメキシコ合衆国大統領夫妻より
28	冬の風景	エンゲルベルト・ビトムスキ	1点	1986年	キャンバス・油彩 本紙53.4 × 68.5	昭和62年（1987）、国賓として来日のポーランド共和国国家評議会議長夫妻より
29	ディナボウル（Dina-Boule）	コルネリス・ジットマン	1点	1975年	ブロンズ D.14.0 × W.15.0 × H.15.0	昭和63年（1988）、国賓として来日のベネズエラ共和国（現ベネズエラ・ボリバル共和国）大統領より
30	シーヌの夜（Nuit du Sine）	バダラ・カマラ（原画）／セネガル装飾美術工房	1点	1988年	ウール・綴織 246 × 320	昭和63年（1988）、国賓として来日のセネガル共和国大統領夫妻より

[謝辞]

本展の開催にあたり、下記の機関、諸氏にご助言、ご協力いただきました。記して深く感謝の意を表します。

[Acknowledgments]

We would like to extend our special thanks to the following individuals and institutions for their generous cooperation and support given to us in organizing this exhibition.

外務省
駐日ポーランド共和国大使館
在セネガル日本国大使館
The Ayala Museum
藍原有理子
川口幸也
木田拓也
吉田憲司
John Leach
Cornelis Zitman
Georgina Padilla y Zobel
Alejandro Padilla Zobel
（敬称略、順不同）

外国（とつくに）からのごあいさつ
―贈られた異国の美

三の丸尚蔵館展覧会図録No.53

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成23年1月22日発行

©2011, The Museum of the Imperial Collections

Greetings from Foreign Countries
―Beauty of Gifts from the Overseas

The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan Exhibition Catalogue No.53

Edited by　The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
Produced by　TOKYO BIJUTSU Inc.
Translated by　Hiroko Yokomizo
Published by　Imperial Household Agency
Issued on　22 January 2011

©2011, The Museum of the Imperial Collections

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

外国（とつくに）からのごあいさつ
—贈られた異国の美

三の丸尚蔵館展覧会図録No.53

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成23年1月22日発行

©2011, The Museum of the Imperial Collections

Greetings from Foreign Countries
—Beauty of Gifts from the Overseas

The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan Exhibition Catalogue No.53

Edited by　The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
Produced by　TOKYO BIJUTSU Inc.
Translated by　Hiroko Yokomizo
Published by　Imperial Household Agency
Issued on　22 January 2011

©2011, The Museum of the Imperial Collections